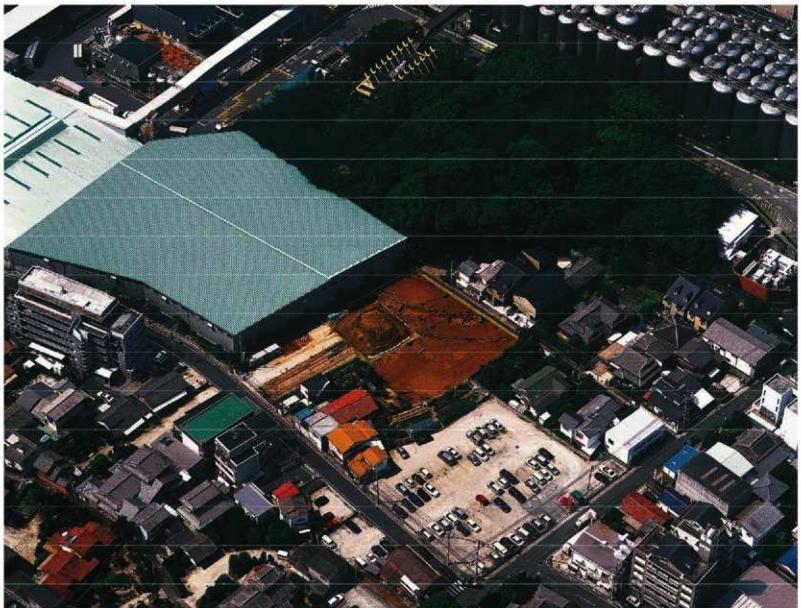


那珂 41

－那珂遺跡群第99次調査報告－



2006

福岡市教育委員会

那珂 41

－那珂遺跡群第99次調査報告－



遺 跡 略 号 NAK-99
遺 跡 調 査 番 号 0 4 2 2

2 0 0 6

福岡市教育委員会

序

博多区の東光寺町から那珂、竹下付近に広がる那珂遺跡群には豊かな文化財が今なお地下に残されており、発掘調査によって往時の暮らしぶりを物語る資料が次々と発見されています。遺跡を子々孫々に守り伝え、活用していくことは現代に生きる我々の責務ですが、ほとんどが市街地の再開発にともなって発見されることから、その保護は困難な状況にあると言えます。

福岡市教育委員会では、那珂遺跡群を保護するとともに、開発によって損なわれる場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。本書は共同住宅建設工事に伴って実施した第99次調査成果について報告するものです。調査では東光寺剣塚古墳を取り巻く三重の周濠を確認し、これまで推定によっていた古墳北東部の規模と形状を確定するなど、大きな成果をあげることができました。

調査に際し、地権者である日下部憲二様に快いご理解と多大なるご協力を賜りましたことを心よりお礼申し上げます。また、関係者のご協力により、調査を円滑に進めることができましたことを深く感謝いたします。この報告書が広く活用され、文化財保護の理解を深める一助となれば幸いと考えます。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は平成16（2004）年5月14日から同年7月30日に福岡市教育委員会が行った、福岡市博多区東光寺町1丁目357-1番地所在の那珂遺跡群第99次発掘調査の報告書である。
2. 調査と整理報告は共同住宅建設に伴う受託事業として行ったが、福岡市が定めた内規により個人事業としての国庫補助適用面積割合分、及び確認調査面積割合分については国庫補助金より充当した。
3. 検出遺構には発見順に3桁の連番号を与え、遺構の性格を示す記号として、SB（掘立柱建物）、SD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑、甕棺墓）、SX（性格不明遺構）、SP（ピット）を頭に付した。また、出土状況を図化した遺物にも別途番号を与え、記号R（遺物）を頭に付した。
4. 本書に使用した遺構実測図の作製は、吉武　学、坂口剛毅が行った。
5. 本書に使用した遺物実測図の作製は、吉武、田中克子が行った。
6. 本書に使用した写真的撮影は吉武が行い、遠景及び全景写真的撮影は空中写真企画に委託した。
7. 近世墓から出土した人骨の分析を九州大学大学院比較社会文化研究院の中橋孝博教授にお願いし、玉稿を賜った。
8. 古墳周濠から出土した馬齒の鑑定は、埋蔵文化財課の屋山　洋が行った。
9. 古墳周濠等の土壤サンプルを採取し、花粉分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
10. 鉄製品及び銅鏡のソフトエックス線撮影は福岡市埋蔵文化財センターによる。
11. 本書に使用した図の製図は吉武、田中が行った。
12. 本書に使用した方位は全て磁北である。
13. 本書の執筆・編集は吉武が行った。
14. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理・活用する。

遺跡調査番号	0 4 2 2		遺跡略号	NAK-99	
調査地地籍	博多区東光寺町1丁目357-1番地		分布地図番号	37 東光寺 0085	
開発面積	1,741m ²	調査対象面積	1,123.235m ²	調査面積	1,049m ²
調査期間	2004年（平成16年）5月14日～2004年（平成16年）7月30日				

本文目次

第一章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の組織.....	1
3. 那珂遺跡群第99次調査地点の位置と周辺調査例.....	2
4. 東光寺剣塚古墳のこれまでの調査.....	4
第二章 発掘調査の記録.....	6
1. 発掘調査の方法と経過.....	6
2. 発掘調査の概要.....	6
3. 検出遺構と出土遺物.....	7
(1) 墨立柱建物.....	7
(2) 古墳時代前期の並列溝.....	8
(3) 東光寺剣塚古墳の周濠.....	13
(4) その他の溝.....	20
(5) 井戸.....	26
(6) 墓棺墓.....	27
(7) 土坑.....	29
(8) その他の出土遺物.....	34
(9) 動物遺存体（福岡市教育委員会埋蔵文化財課 屋山 洋）.....	36
(10) 墓輪.....	37
第三章 おわりに.....	45
附.1 福岡市那珂遺跡群第99次調査出土の近世人骨 （九州大学大学院比較社会文化研究院 中橋孝博）.....	49
附.2 那珂遺跡群第99次調査の花粉分析（バリノ・サーヴェイ株式会社）.....	53

挿図目次

Fig. 1 那珂遺跡群の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)	2
Fig. 2 周辺の調査地点 (1/3,000)	3
Fig. 3 第99次調査区の位置 (1/1,000)	5
Fig. 4 遺構の看置 (1/200)	(折り込み)
Fig. 5 SB-026出土遺物 (1/1)	7
Fig. 6 SB-026 (1/60)	7
Fig. 7 古墳時代前期の並列溝 (1/300)	8
Fig. 8 北側溝SD-021・022・036 (1/60)	9
Fig. 9 SD-021・022・036出土遺物 (1/3)	9
Fig. 10 南側溝SD-007・014・015・040・041 (1/60)	11
Fig. 11 SD-014・015・040出土遺物 (1/3)	12
Fig. 12 東光寺剣塚古墳第1～3周濠 (1/100)	(折り込み)
Fig. 13 SD-001 (第1周濠)と005 (1/60)	13
Fig. 14 SD-002 (第2周濠)西部遺物出土状況 (1/60)	14
Fig. 15 SD-002 (第2周濠)中央部遺物出土状況 (1/60)	15
Fig. 16 SD-002 (第2周濠)東部遺物出土状況 (1/60)	16
Fig. 17 SD-002 (第2周濠)出土遺物 (37～38件) / 他11/3)	17
Fig. 18 SD-003 (第3周濠)出土遺物 (1/60)	19
Fig. 19 SD-003 (第3周濠)出土遺物 (1/3)	20
Fig. 20 SD-004・013・017 (平面図) / 100、他1/50)	21
Fig. 21 SX-027・028、SD-037・041上層 (1/60)	23
Fig. 22 SD-030・031・032 (1/60)	24
Fig. 23 その他の溝の出土遺物 (1/3)	25
Fig. 24 SE-039 (1/40)	27
Fig. 25 SE-039出土遺物 (1/3)	27
Fig. 26 SK-033 (1/20) と周辺の遺構 (1/60)	28

Fig.27 SK-033出土遺物 (78は1/8、他は1/3) 29	Fig.36 墳輪3 (1/4) 40
Fig.28 SK-006・008・009・016 (1/40) 30	Fig.37 墳輪4 (1/4) 41
Fig.29 SK-010 (1/60) 31	Fig.38 墳輪5 (1/4) 42
Fig.30 SK-018・019・020・024・038 (1/40) 33	Fig.39 墳輪6 (1/4) 43
Fig.31 SK-010・016・019出土遺物 (1/3) 33	Fig.40 墳輪7 (1/4) 44
Fig.32 近世墓SK-101出土遺物 (103は1/5、他は1/3) 35	Fig.41 古墳時代前期構の推定線 (1/1,000) 46
Fig.33 その他の出土遺物 (125～131は1/2、他は1/3) 36	Fig.42 東光寺剣冢古墳復元推定 (1/1,200) 47
Fig.34 墳輪1 (1/4) 38	Fig.43 第2周塚 (SD-002) 墳輪出土状況 48
Fig.35 墳輪2 (1/4) 39	

図版目次

扉 調査地点から南方の那珂八幡古墳方面を遠望 (北から)	
PL. 1	1. I区全景 (北東から) 2. I区全景 (左上が北)
PL. 2	1. II区全景 (西から) 2. II区西半部 (北西から) 3. II区東半部 (南西から)
PL. 3	1. SB-026 (東から) 2. SD-040 (東から) 3. SD-007 (北東から) 4. SD-021 (東から) 5. 第1周塚SD-001 (北西から) 6. 第2周塚SD-002 (北西から)
PL. 4	1. 第2・3周塚SD-002・003 (南東から) 2. 第2周塚SD-002 (南東から)
PL. 5	1. SD-002西側ベルト土層断面 (東から) 2. SD-002中央ベルト土層断面 (南東から) 3. SD-002東側ベルト土層断面 (南東から)
PL. 6	1. SD-002西側遺物出土状況 (西から) 2. SD-002西側遺物出土状況 (東から) 3. SD-002中央遺物出土状況 (南東から) 4. SD-002東側遺物出土状況 (南東から) 5. 第3周塚SD-003 (西から) 6. SD-003馬鹿出土状況 (北西から)
PL. 7	1. SD-003西側ベルト土層断面 (東から) 2. SD-003中央ベルト土層断面 (南東から) 3. SD-003東側ベルト土層断面 (南東から)
PL. 8	1. SD-004・013 (北東から) 2. SD-013・SK-016 (北西から) 3. SX-027・028 (南から) 4. SD-030 (南西から) 5. SE-039 (南から) 6. 瓦棺墓SK-033 (東から)
PL. 9	1. 瓦棺墓SK-033 (東から) 2. SK-010 (北西から) 3. SK-016 (北東から) 4. SK-018 (西から) 5. SK-024 (南東から) 6. 調査作業風景 (北西から)
PL.10	出土遺物 I (縮尺不同)
PL.11	出土遺物 II (縮尺不同)
PL.12	出土遺物 III (縮尺不同)

表目次

Tab. 1 検出遺構一覧 (6～7間折り込み)

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

博多区の那珂・比恵遺跡群が弥生時代以降の福岡平野の中核を担った遺跡として注目されて、はや半世紀以上が経過した。福岡市教育委員会はこの重要な遺跡を保護するため、ビル建設などの開発行為が予定された場合には事前に試掘調査を行って遺跡の状況を確認するとともに、現状保存が困難な際には地権者等の協力を得て記録保存のための緊急発掘調査を行っている。

平成16年、福岡市博多区東光寺町1丁目357-1番地の畠地 1741m²において、日下部憲二氏による共同住宅建設が計画され、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に1月19日付けで埋蔵文化財の有無についての照会があった。申請地は福岡市文化財分布地図上では那珂遺跡群に含まれ、かつ東光寺剣塚前方後円墳の東側に隣接しており、古墳周濠や甕棺墓等の遺構が存在する可能性が極めて高いものと考えられた。このため埋蔵文化財課では平成16年2月12日に試掘調査を行い、申請地に対して設けた7カ所のトレンチにより、地表下15~40cmで古墳周濠、堅穴住居、甕棺墓の可能性のある土壙等の遺構を確認した。試掘結果を踏まえ施工側と協議を持ったが、遺構面が浅いこともあって建築工事による遺跡の破壊は避けがたい状況にあり、やむなく記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成16(2004)年5月14日から同年7月30日に、整理報告書作成は平成17年度に、ともに受託事業として埋蔵文化財課が行った。ただし、申請地内に予定された建築物は低層共同住宅3棟で各個の住宅間には破壊を免れる部分が生じ、調査区が細切れとなると予想されたため、遺跡の重要性に鑑みて住宅間の残地についても調査に含めることとし、これについては重要遺跡確認調査として国庫補助金をあてた。また、福岡市が定めた内規により、個人事業としての国庫補助適用面積割合分についても同じく国庫補助金より充当した。

2. 調査の組織

調査委託 日下部憲二

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子

調査総括 埋蔵文化財課長 山口譲治

埋蔵文化財課調査第2係長 池崎譲二

調査庶務 文化財整備課管理係 御手洗 渚(前任)、鈴木由喜(現任)

調査担当 埋蔵文化財課事前審査係 久住猛雄(試掘・事前協議担当)

埋蔵文化財課調査第2係 吉武 学(調査担当)

調査協力 坂口剛毅(技能員)、池田省三、上野龍夫、江島光子、加藤常信、唐島栄子、坂下達男、佐藤俊治、嶋 ヒサ子、清水 明、大長正弘、高野瑛子、中村尚美、西田文子、布江孝子、野口ミヨ、野田淳一、平川正夫、松永シゲ子、三浦 力、宮崎タマ子、持丸玲子、森田祐子、山内 恵、山崎光一、山下智子、結城フチ子、吉住政光、吉田恭子、吉田米男(五十音順、敬省略)

整理協力 田中克子(技能員)、下山慎子、萩尾朱美、森 寿恵(五十音順、敬省略)

事業主の日下部憲二様には調査についてご理解頂くとともに、多大なるご協力を賜りました。また、施工業者の積水ハウス株式会社には条件整備等についてご尽力頂きました。深く感謝致します。

3. 那珂遺跡群第99次調査地点の位置と周辺調査例 Fig.1・2

那珂遺跡群は、御笠川・那珂川等の河川により形成された低平な台地上に立地する。この台地は福岡市博多区博多駅南から那珂、南区五十川・井尻、春日市須玖を経て那珂川町安徳へと断続的に連なる洪積中位段丘面のひとつで、主に阿蘇山起源の広域テフラであるAso-4火砕流堆積物によって構成され、沖積低地から3~20mの比高差を有するローム台地となっている。これらの台地の末端部は中小河川の浸食により更に細く枝分かれし、あるものは八つ手状に、またあるものは低平な独立丘となっており、博多駅南から那珂方面の台地にはそれが特に顕著であるが、区画整理や市街化により平坦に均され現在ではそのような地形を実際に目にすることはできない。

那珂遺跡群は、北に連続する台地上に展開する比恵遺跡群とともに、弥生時代から古代にいたるまで奴国あるいは那珂郡の中心的な役割を担った遺跡のひとつと考えられ、各時代の重要な遺構・遺物が多く認められる。周辺の遺跡には、北は湿地を挟んで博多遺跡群、東は諸岡川を挟んだ台地上に板付遺跡・高畠遺跡、南は鞍部を挟んで五十川遺跡、谷を隔てた台地上に井尻B遺跡などが取り巻き、沖積低地には弥生時代の水田を検出した東比恵3丁目遺跡などがある。一方、西側は段丘崖となり、塙原の地名が示すように遡くまで入海があり高宮丘陵のあたりまで広く遺跡の空白地帯となっている。

近隣ではアサヒビル工場内での調査など多数の発掘調査を実施しており、旧地形についても各調査報告書に詳しいが、以下に主な遺構を含めて要約する（「第○次調査」は「○次」と略す）。

①当調査地点は那珂遺跡群の北端付近に位置する。12次の南側が最も高く現在の標高10m強で、台地の尾根筋は東光寺剣塚古墳に向かって伸びていたと考えられ、剣塚後円部のトレンチでは海拔9.4m



Fig. 1 那珂遺跡群の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

に旧地表面がある。尾根筋の東は緩く、西は急に傾斜するとみられる。弥生時代末～古墳時代前期にはこの尾根筋をたどるように那珂遺跡群から比恵遺跡群へと続く並走する二条の溝が磁化からやや西に偏して掘られており、近隣では15・16・32・63・71・77次で検出している。延長1500m以上に達するとみられ、道路側溝とする見解が有力である。

②北側は比恵遺跡群の台地との間に浅い鞍部があるが、遺跡は連続する。鞍部西端には北西から谷が

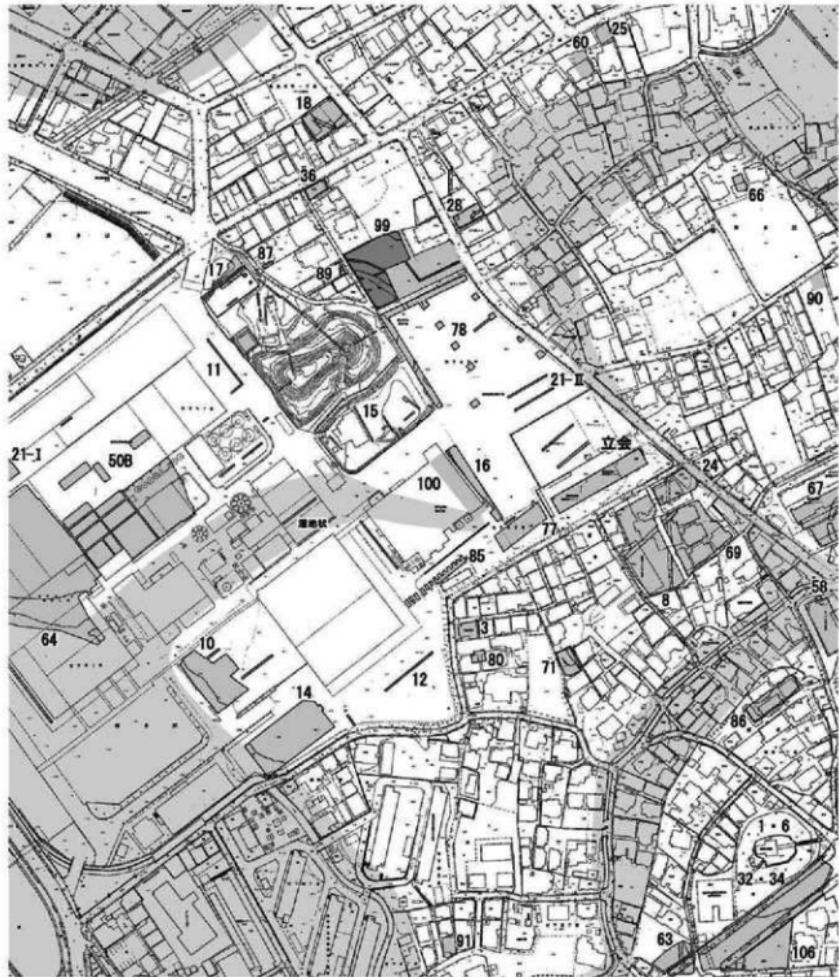


Fig. 2 周辺の調査地点 (1/3,000)

食い込み、比恵遺跡群41次では台地の落ち際と直下を流れる水田水路を検出している。台地上では近隣の18次で弥生時代後期の断面Y字形の深い環濠の一部を確認しており、当該期には那珂遺跡群は比恵遺跡群とともにひとつの単元として大規模な集落を形成していたと考えられている。

- ③西側は削平や埋立てが著しいが、10・14・64次で段丘の落ち際を確認した。また、64次と10次の間に東へ入り込む谷があり、先端は16次付近にまで及ぶ。この谷と②の谷に挟まれた部分は西へ張り出す広い舌状台地になっていたと考えられ、台地縁辺で突堤文頭の包含層や弥生時代前期～中期初頭の貯蔵穴を確認しており、比較的規模の大きな集落の存在が想定される。また、この中央に位置する21次で確認した甕棺墓を主体とする墓群は、溝状の土坑で囲まれた弥生時代中・後期の区画墓と考えられている。また、古墳時代前期には防御的性格の溝を伴う集落が形成される。
- ④東側は北東から狭い谷が入り込む。当調査区でも東端の遺構は残りが良く、基盤土が緩やかに東へ下る状況を示す。南隣の78次でも同様の状況である。この谷は尾根を越した南側では切通状となつておらず、69次でその一部を確認し、人為的なものと考えている。この谷と切通で隔てられた東側は、東端を御笠川で画された独立した台地となり、その南端の67次では弥生時代前期後半成立の環濠やこれを前後する埋葬遺構を確認しているが、全体的に发掘調査がまだ少ない。
- ⑤南側は那珂八幡古墳との間に狭い鞍部があり、ここに北西（那珂川→御笠川）へ導水する水路が丘陵を横断して掘削されている。58次ではこの鞍部の落ち際を確認し、谷底に堆積した粘質土から中世までの遺物が出土した。自然地形を利用して形成された溝の可能性が考えられよう。
- 以上の復元地形から、南北に伸びる台地と、東西にそれぞれ独立する台地を結んだ線の交差点付近に当調査地点は位置するとみられる。今回の調査では弥生時代中期後半、古墳時代前期、同後期（東光寺剣塚古墳）、奈良時代、中世後半の各遺構を確認したが、このそれぞれの時期は那珂遺跡群で官衙を含む集落や墓地が隆盛となる時期と重なっていることにも留意しておきたい。

4. 東光寺剣塚古墳のこれまでの調査 Fig.3

東光寺剣塚古墳に直接触れた過去の調査には以下のものがある。

第15次調査（「東光寺剣塚古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第267集 1991）

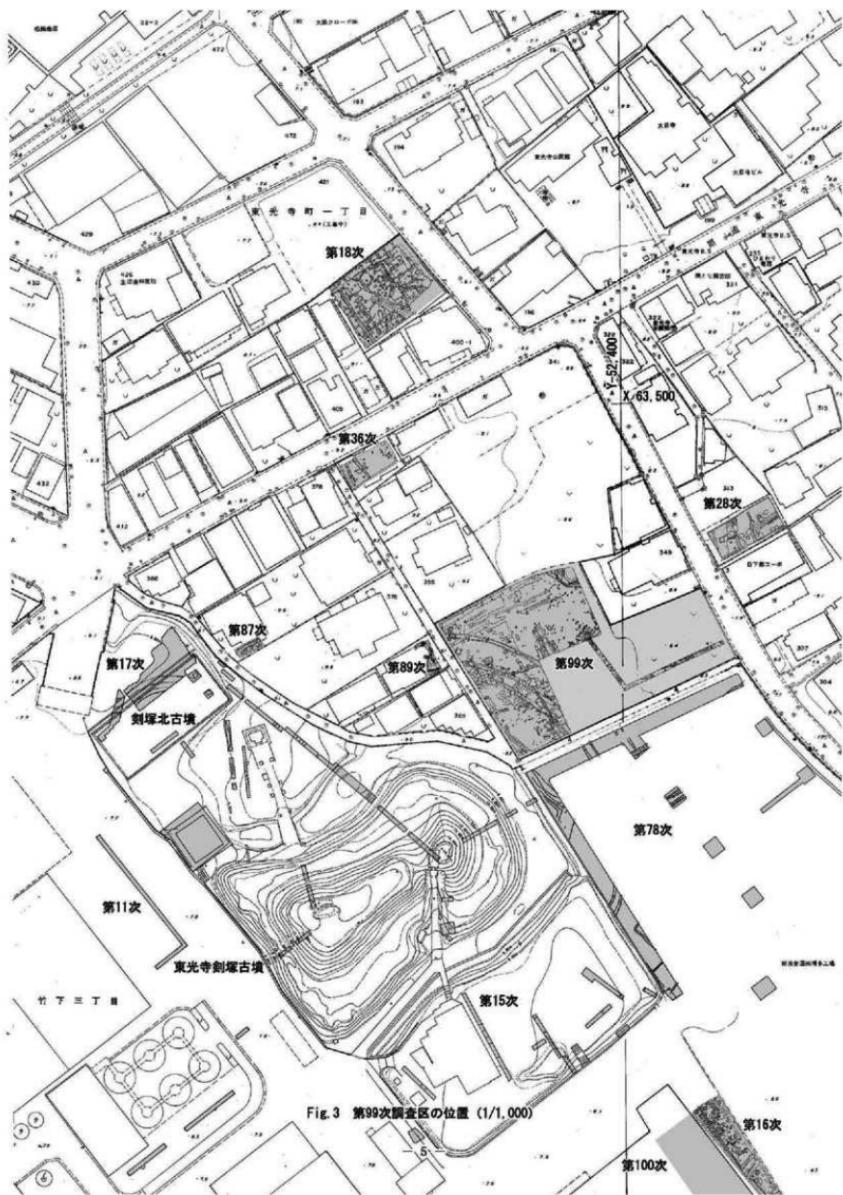
1988年度に、那珂川流域の前方後円墳を対象とする重要遺跡確認調査の一環として、墳丘と石室の調査を行った。墳丘は二段築成で、葺石ではなく、三重の周濠が巡り、第3周濠南東側に造出しが付くこと等が判明した。石室や内部の石屋形の形態、埴輪や須恵器等の遺物から、6世紀後半～末築造と推定されていた年代観を6世紀中葉に修正するとともに、7世紀前葉まで追葬もしくは何らかの儀礼が行われたことが明らかとなった。また、隣接する変電所移設工事予定地で並行して行った第17次調査では、前方部北側により古相の埴輪を持つ前方後円墳の一部を発見し、剣塚北古墳と呼称した。（「那珂5-1第10～12・14・16・17・21次調査報告一」同上第291集 1991）

第78次調査（「那珂31-那珂遺跡第77次・78次調査報告一」同上第715集 2002）

2000年度にアサヒビル株式会社博多工場内の貯ビン場覆屋建設に伴い基礎工事部分のみを調査したが、古墳周濠にかかる部分は幅4mの細長い調査区をL字形に設定した。3重の周濠の位置を確認し、第3周濠の造出しが規模が第15次調査の想定よりも大きいことが判明した。

第89次調査（福岡市埋蔵文化財年報VOL.18 2005）

2003年度調査。東光寺剣塚古墳後円部北側の住宅地において、共同住宅の配水施設建設部分のみを調査した。面積が狭いが、古墳第2周濠の一部が調査区の南側にかかり、全域に甕棺墓等からなる弥生時代の墓域が広がることが判明した。未報告。



第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

前章でも述べたように、申請地内には低層共同住宅3棟の建築が予定され、各棟の間には破壊を免れる部分が生じたが、遺構の重要性に鑑みて調査区が細切れとなることを避け、住宅間の残地についても調査に含めた。また、共同住宅に付随する給配水管設備工事により破壊される部分が別途あり、これについては幅1mで調査を行った。前者をI区、後者をII区と呼び、順に調査を行った。I区は平面L字形を呈する調査区で、敷地外縁から0.5~1.0mの引きを取ったため、調査区は東西36m、南北39mとなった。壁際に甕棺墓を検出したため一部で調査区を拡張した。調査面積は1,006m²となる。II区はL字に曲がる幅約1mの細長い調査区で、東西28m、南北16m、調査面積は43m²である。表土は重機を用いて除去し、表土が極めて薄いため調査終了後は遺構のみを埋め戻した。また、建築工事にあたっては遺構を極力破壊しないように施工業者を指導した。

遺構の記録は『博多区・南区内(那珂~井尻地区)遺跡基準点測量委託 四級基準点測量成果簿(平成6年2月)』の成果を利用し、日本測地系の国土地標(第Ⅱ系)に合わせた10mメッシュの測量杭を設けて実測を行った。標高もこれによった。実測は1/20平面実測の他、1/100平板測量により周辺地形を、1/50平板測量により古墳周濠の等高線を記録し、適宜土層図や個別遺構図等を作製した。また、遠景・全景写真撮影を空中写真企画に、出土した土壤の花粉分析をパリノ・サーヴェイ株式会社にそれぞれ委託した。近世墓より出土した人骨の鑑定は、九州大学大学院比較社会文化研究院の中橋孝博氏にお願いした。

2. 発掘調査の概要 Fig.4, PL.1・2

調査地点は東光寺剣塚古墳北東側の畠地で、表土は薄く20~30cmの畑耕作土を除去すると鳥栖ローム~八女粘土の基盤層となり、強い削平を受けていた。遺構面の標高は8m前後である。

検出遺構は、弥生時代中期の甕棺墓1、古墳時代前期の溝4、東光寺剣塚古墳の第1~3周濠、弥生~古墳時代の掘立柱建物1、古代の溝1・土坑1、中世の溝3・土坑1、及び時期不詳の土坑少數・小ピット、近世後期の甕棺墓多数(大半が改葬済み)で、調査面積に比して遺構は少ない。

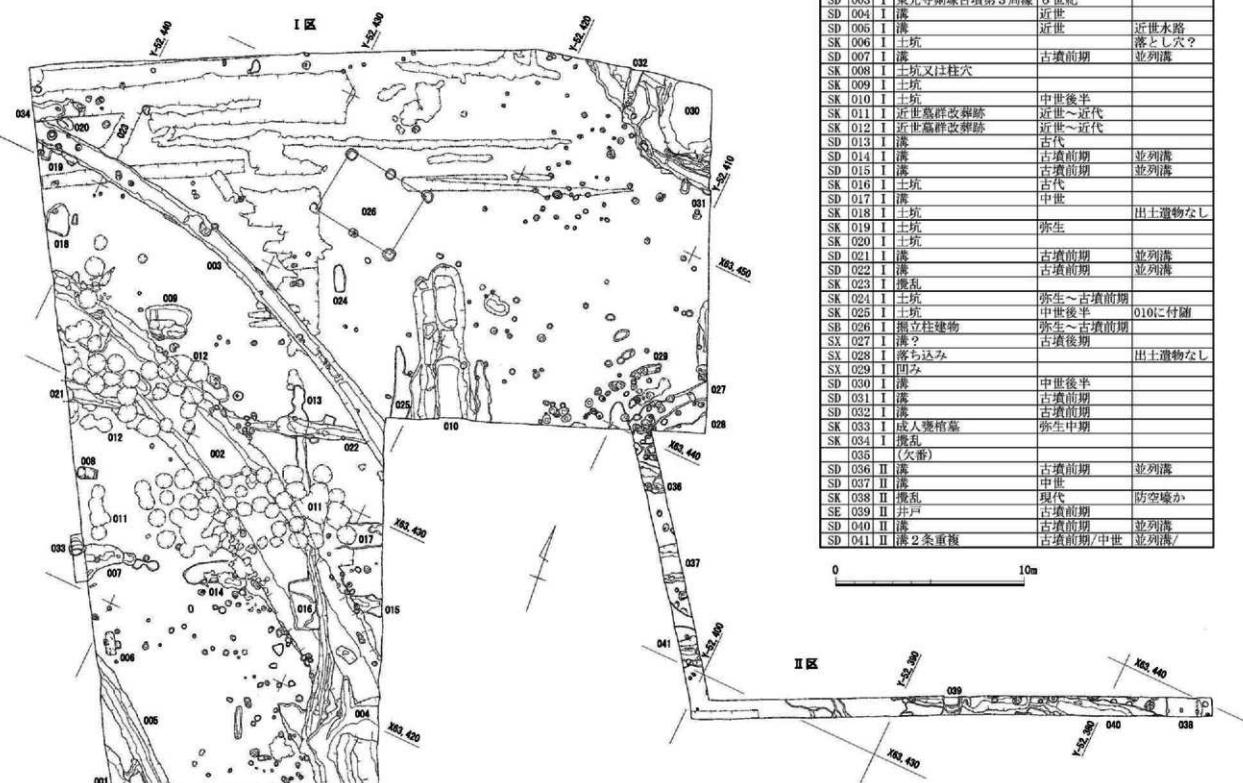
古墳時代前期の溝は東西方向に2条が平行し、磁北から80°東偏し、溝内法で7.5~8.1mの幅がある。溝底面には著しい起伏があり、細長い土坑が連続しているような状況を呈する。那珂遺跡群から比恵遺跡群にかけて略南北に連なる弥生時代終末~古墳時代初頭の並列溝の存在が指摘されているが、今回の溝はこれに交差しており、整地層や硬化面は認められなかつたものの道路側溝の可能性が高い。東光寺剣塚古墳の周濠のうち、最も内側の第1周濠は一部を確認したのみで、近世の遺物が出土した。第2周濠は後世の遺構や、近世墓と近代の改葬によりかなり破壊されているが、幅約4m、深さ約1mが残り、底面からやや浮いた位置で埴輪・須恵器片が散漫に出土したほか、南端と北端で埴輪がまとまって出土した。第3周濠は幅1m前後、深さ0.3~0.5mで、遺物は少なく、底面からやや浮いた位置から馬首の一部が出土した。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・陶磁器等がコンテナ40箱、獸骨・木製品・銅鏡・近世人骨等が3箱出土した。量的には埴輪片が最も多い。

古墳時代前期の東西方向に伸びる並列溝を新たに発見したこと、これまで推定によっていた東光寺剣塚古墳の北東部外周の形状と規模が確定したことの2点が、最も大きな調査成果と言えよう。

Tab. 1 検出遺構一覧

記号	区	種類	時代	備考
SD 001	I	東光寺御塚古墳第1周塚	近世	近世溜め池
SD 002	I	東光寺御塚古墳第2周塚	6世紀～古代	上層は古代
SD 003	I	東光寺御塚古墳第3周塚	6世紀	
SD 004	I	濠	近世	
SD 005	I	濠	近世	近世水路
SK 006	I	土坑		落とし穴?
SD 007	I	土坑	古墳前期	並列溝
SK 008	I	土坑又は柱穴		
SK 009	I	土坑		
SK 010	I	土坑	中世後半	
SK 011	I	近世墓群改葬跡	近世～近代	
SK 012	I	近世墓群改葬跡	近世～近代	
SD 013	I	濠	古代	
SD 014	I	濠	古墳前期	並列溝
SD 015	I	濠	古墳前期	並列溝
SK 016	I	土坑	古代	
SD 017	I	濠	中世	
SK 018	I	土坑		出土遺物なし
SK 019	I	土坑		弥生
SK 020	I	土坑		
SD 021	I	濠	古墳前期	並列溝
SD 022	I	濠	古墳前期	並列溝
SK 023	I	堆乱		
SK 024	I	土坑	弥生～古墳前期	
SK 025	I	土坑	中世後半	010に付随
SB 026	I	獨立柱建物	弥生～古墳前期	
SX 027	I	濠?	古墳後期	
SX 028	I	落ち込み		出土遺物なし
SX 029	I	凹み		
SD 030	I	濠	中世後半	
SD 031	I	濠		古墳前期
SD 032	I	濠		古墳前期
SK 033	I	成人埋植墓	弥生中期	
SK 034	I	堆乱		
035	(欠番)			
SD 036	II	濠	古墳前期	並列溝
SD 037	II	濠	中世	
SK 038	II	堆乱	現代	防空壕か
SE 039	II	井戸	古墳前期	
SD 040	II	濠	古墳前期	並列溝
SD 041	II	海2条重複	古墳前期/中世	並列溝/

0 10m



・図中の数字は遺構番号
・一点銀線は堆乱
・座標系は昭和43年地籍図表示第3059号による第II座標系

Fig. 4 遺構の配置 (1/200)

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 掘立柱建物 SB-026 Fig.5・6、PL.3

掘立柱建物は1棟を確認した。他にも覆土が暗褐色を呈する中世以降のものとみられるビットが多数あるが、建物に復原できるものはなく、多くは木根とみられる。SB-026の柱穴は周辺の他のビットより一回り大きく、掘り方も整った印象を受ける。覆土も他と異なり、黒色粘質土である。

SB-026はI区の中央北よりに位置する東西に長い1間×2間の建物で、桁行方位はN-77°-Wにところ。桁行全長は4.62m、柱間は東から2.26m、2.36mで、梁行の柱間は3.6mを測る。柱穴は円～椭円形プランを呈し、径38～70cmで、深さは7～19cmと極めて浅い。南西隅の柱穴は検出時には円形のプランを確認できたが、浅いため掘削後は攪乱との境界が曖昧となった。いずれも柱痕跡は認められない。柱穴からは土器が出土せず詳細な時期は不明であるが、造構覆土から弥生時代～古墳時代前期頃の遺構と考えられる。

1は南東隅の柱穴から出土した二次加工のある片である。下縁部に主要・離面側から粗い小・離を加え、その他の縁辺部にも数回の小・離がある。漆黒色で一部が半透明の黒曜石で、縞状に筋理が入る。

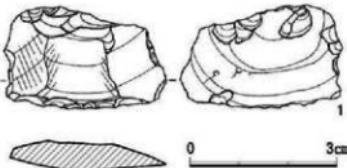


Fig. 5 SB-026出土遺物 (1/1)

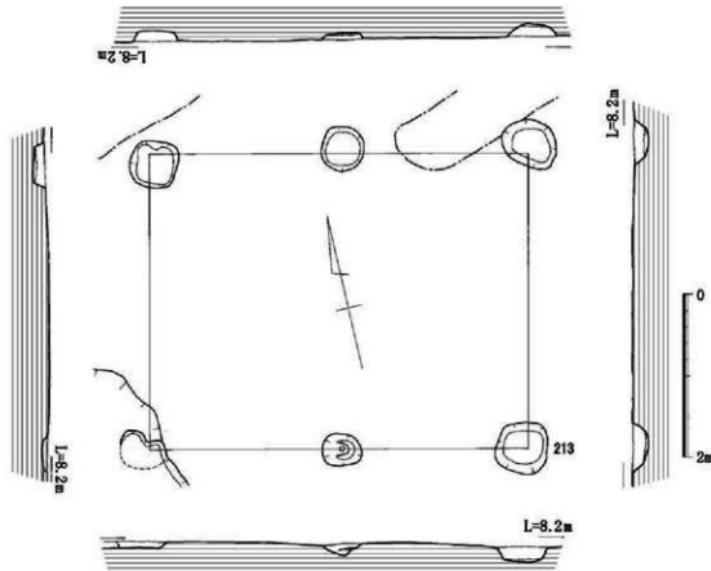


Fig. 6 SB-026 (1/60)

(2) 古墳時代前期の並列溝 Fig.7

I 区の南半部と II 区で検出した SD-021・022・036、及び SD-007・014・015・040・041 下層は、主軸方位、覆土、出土遺物などからみて、それぞれ一連の遺構であると考えられ、東西に並走する 2 条の溝状遺構に復原できる。東西の総延長は、北側の溝 SD-021・022・036 が 32m、南側の溝 SD-007・014・015・040・041 下層が 58m に達する。主軸方位はいずれも磁北から 80° 東偏し、完全に平行している。溝の横断面形はおむね逆台形状をなすが、部分的に底が深くなるところがあり、SD-040 などは一見すると土坑が連なっているような状況を呈する。SD-007 と SD-014 の間は溝が途切れしており、隣接と考えることもできるが、削平が著しいことから深い部分のみが残った結果かもしれない。溝と溝とに挟まれた部分の幅は、実計測可能な部分で 7.5~8.1m の数値を示し、推定線上で 7.8m を測る。遺構覆土はいずれも黒色粘質土を主体とする。以下、北側溝と南側溝とに分け、遺構番号順に報告する。なお、図は方位を描えて東から順に並べた。

北側溝 SD-021 Fig.8, PL.3

I 区中央の西壁際に位置し、西側は調査区外へ伸展する。東側は SD-002 に切られ、近世墓による破壊も著しい。長さ 4.6m を確認した。幅 0.5~1.0m。底面には起伏があり、中央に 10cm ほどの段差があるが、東西で底面の比高差はほとんどない。横断面形は逆台形状を呈し、遺構検出面からの深さは 0.4~0.6m。

SD-021 出土遺物 Fig.9

出土遺物は弥生土器及び土器細片で、須恵器片 1 点を含む。弥生土器には甕棺片や丹塗り土器がある。須恵器片は 1 cm 大の細片で、SD-002 または近世墓等からの混入遺物と考えられる。

2 は弥生土器高杯の脚端部残欠で、ラッパ状に開く。器面が摩滅するが、外面縦位の丹塗り磨研、内面ヘラナデで端部は横ナデ調整。器面は暗橙色、丹は暗赤色を呈し、胎土は精良、焼成不良。

北側溝 SD-022 Fig.8, PL.1

I 区のほぼ中央に位置する。西側は SD-002 に、東

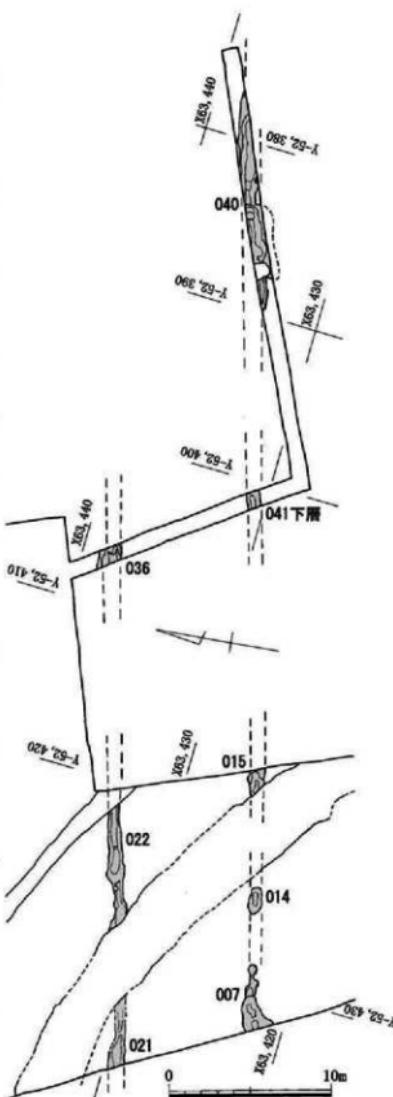


Fig. 7 古墳時代前期の並列溝 (1/300)

側はSD-036に破壊され、中央は古代溝SD-013に切られる。また、西側は木根とみられる小ピットが多数切り込む。長さは8m弱、幅は0.5~1.0mで一部狭いところがある。横断面形は逆台形状を呈し、深さ0.03~0.4mで、中央部が土坑状に掘り埋められ、西側は特に浅い。

SD-022出土遺物 Fig.9

弥生土器1点、土師器片3点の他、須恵器壺片1点があるが後世の造構からの混入遺物であろう。
3は弥生土器高杯の脚で、杯底に差し込み粘土で補強する。外面は縱方向に丹塗り磨研し、内面はシボリ痕をナデ調整する。器面は黄褐色で丹は暗赤色をなし、胎土に砂粒を少量含むが精良で、焼成良好。

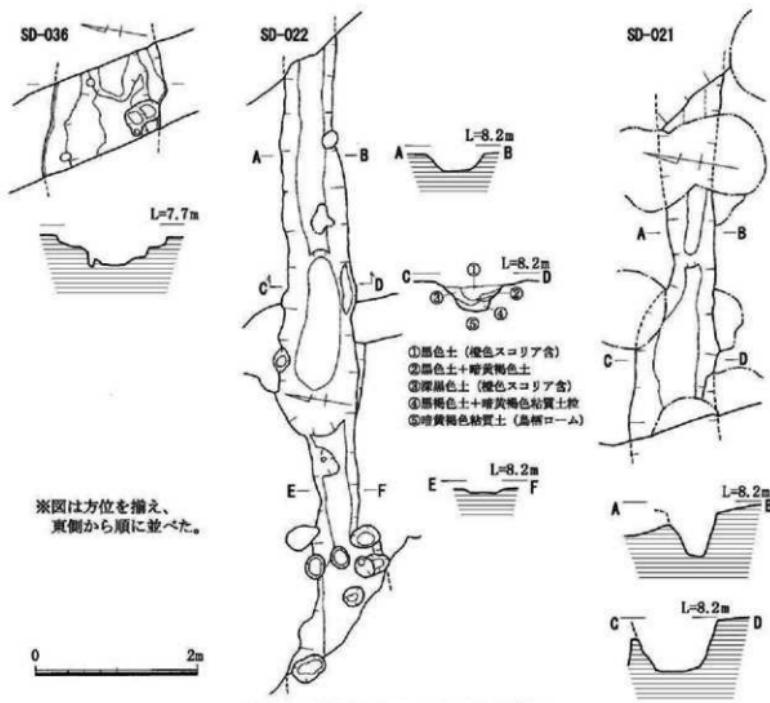


Fig. 8 北側溝SD-021・022・036 (1/60)

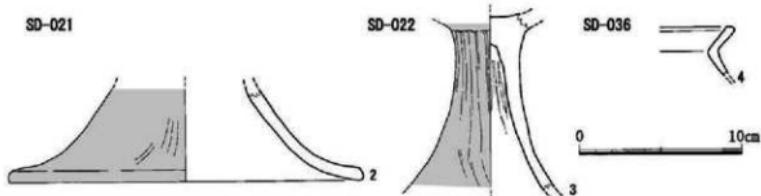


Fig. 9 SD-021・022・036出土遺物 (1/3)

北側溝SD-036 Fig.8, PL.2

II区の北端部で検出した。II区は幅約1mの狭い調査区であったため、一部を確認したに留まる。長さ1.2m、幅1.3~1.4m、深さ0.45mで、横断面形は浅い逆台形状を呈し、底面は東側へやや落ちる。

SD-036出土遺物 Fig.9

弥生土器甕1点、古式土師器甕1点の他、土器小片10点が出土した。

4は古式土師器甕の口縁部小片である。やや内湾して開き、端部は内側へ肥厚する。頭部外面に横ナデ痕があるが、他は摩滅のため調整不明。淡橙~淡灰色で、胎土に細砂粒を含み、焼成良好。

南側溝SD-007 Fig.10, PL.3

I区の南西部に位置する。西側では堀塚墓SK-033を切り、下層には更に別の造構が存在するため、調べて底面を掘り過ぎた。調査区の西区外へと進展するが、土層断面の観察から点線のような復原形が推定され、確実で南へ湾曲するような平面プランを示す。東側は浅くなつて消滅するが、ピット状の浅い窪みが連なつており、併せて図示した。これを含めた東西長は4.2m、幅は最大1.7mである。西壁際は著しく掘りすぎており、横断面形は土層図に示すように皿状を呈し、深さは0.25m。

弥生土器・古式土師器を含む土器小片が25点出土したが、図示できるものはない。

南側溝SD-014 Fig.10, PL.1

I区の南部で検出した。古墳周濠SD-002や木根による破壊が著しく、土坑状のプランを呈するが本来の形状を留めていない。東西長1.6m、幅0.8m、深さ0.3m。横断面形は逆台形状をなす。削平によつて溝の深い部分のみが残つたものと考えられる。

SD-014出土遺物 Fig.11

土師器片5点、埴輪片6点、古代須恵器1点が出土したが、上記したように後世の造構や木根による攪乱が著しく、多くはSD-002上層もしくは木根からの混入品であろう。

5は古代の須恵器坏蓋である。扁平な宝珠状紐が付き、口縁端部に返りを持つ。天井部の1/2強に向転ヘラ削り、内面にナデ調整を加える。暗灰青色を呈し、焼成はやや不良。7世紀末か。

南側溝SD-015 Fig.10, PL.1

I区南部の東壁際で検出した。東は区外へ伸び、西はSD-002に切られる。現況で長さ1.7mを確認した。最大幅は約1mで、横断面形は逆台形状をなす。西よりの底面がやや深く、深さ0.2m強。

SD-015出土遺物 Fig.11

弥生土器などの土器片26点が出土した。

6は弥生土器甕の底部片で、平底。内外面ナデ調整。暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成不良。

南側溝SD-040 Fig.10, PL.3

II区の東部で検出した。一連の溝のうち最も長い14m分を確認し、この造構により一連の並列溝の存在を認知した。調査区の西側では溝の南岸、東側では溝の北岸が主に検出され、中央部で幅1.1mを測る。横断面形はおおむね逆台形状を呈し、覆土は黒色粘質土である。底面には起伏があり、中央部がやや浅く、東西が深く、深さは東から順に0.6m、0.35m、0.5m。西端付近で井戸SE-039に切られるが、Fig.24の土層図に示す通り、溝SD-040が完全に埋没する前に井戸が掘られている。

SD-040出土遺物 Fig.11

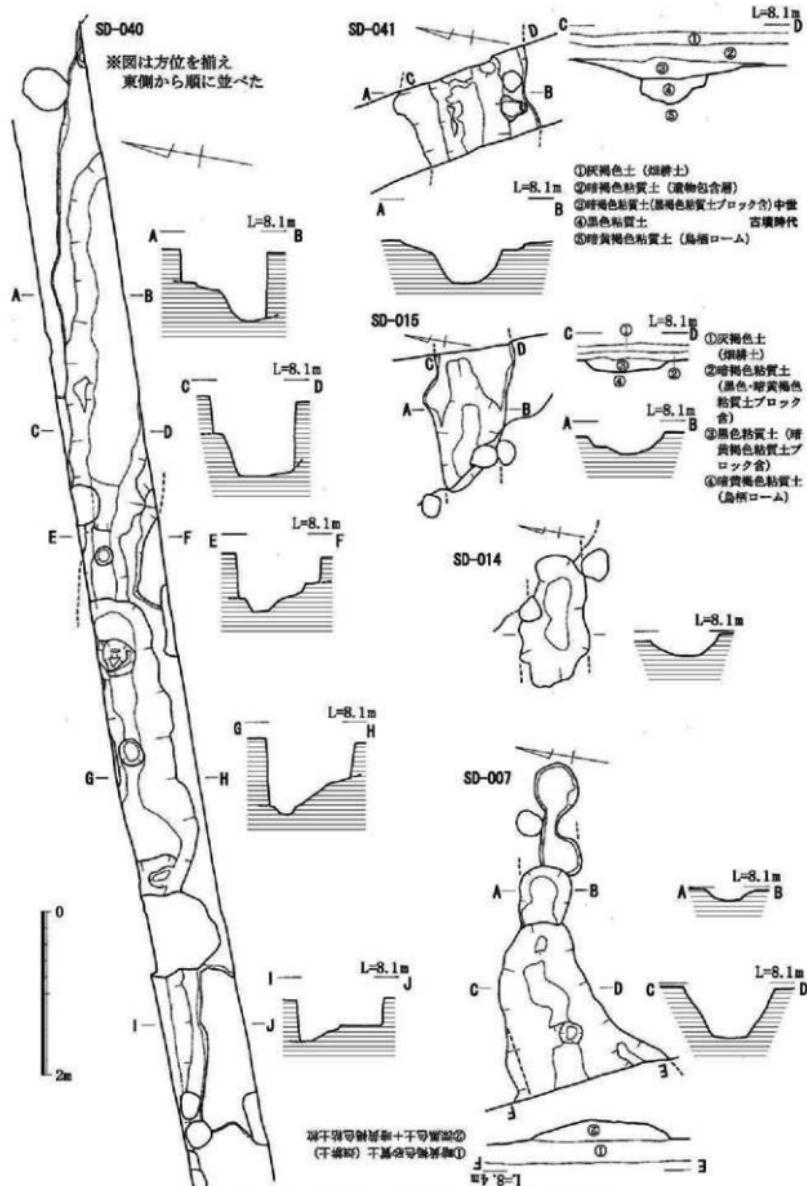


Fig. 10 南側溝SD-007・014・015・040・041 (1/60)

遺物はコンテナ1/2箱分が出土した。大半が弥生土器で、同一個体とみられる古式土師器甕の胴部片4点があるが小片のため図化し得ない。他に古代の环類と思われる須恵器細片2点が出土しており、混入品であろう。

7~12は弥生土器である。7は口縁が逆「L」字形に屈曲する甕で、摩滅して調整痕は不明である。淡橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成不良。8と9は接合しないが同一個体と思われる平底の甕である。口縁は「く」字形に屈曲して開き、胴径は口径を上回る。外面綫～斜刷毛目、内面ナデ調整で、口縁横ナデ。淡橙褐～淡褐色を呈し、胎土に粗砂混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。小片のため法量は不正確である。10は複合口縁甕の頸部か。器面が落し、調整痕・色調は不明。胎土に細砂粒・赤色鉱物を含み、焼成不良で破面が黒色をなす。11は甕または甕の底部である。外面斜刷毛目で、内面は不明。橙色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好。12は甕の底部か。丸底気味の不安定な平底で、外面ヘラ削り、内面ヘラ状工具によるナデ調整。橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好である。

後述の井戸SE-039が溝の中層から掘り込まれており、埋没時期は古墳時代前期と考えられよう。

南側溝SD-041下層 Fig.10, PL.2

II区の南西部で検出した。中世の溝と完全に重複している。上層が中世、下層が古墳時代前期である。長さ1mを確認した。上部は中世溝に破壊されるが、現況で幅0.8m。横断面形は逆台形状をなし、造構造から底面まで0.5mを測り、底面には凹凸がみられる。

土器小片2点が出土したが、図示できるものはない。

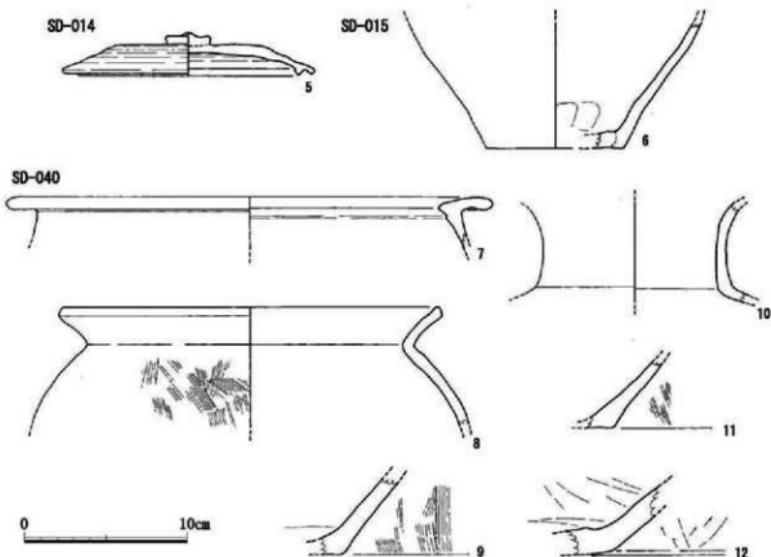


Fig. 11 SD-014・015・040出土遺物 (1/3)

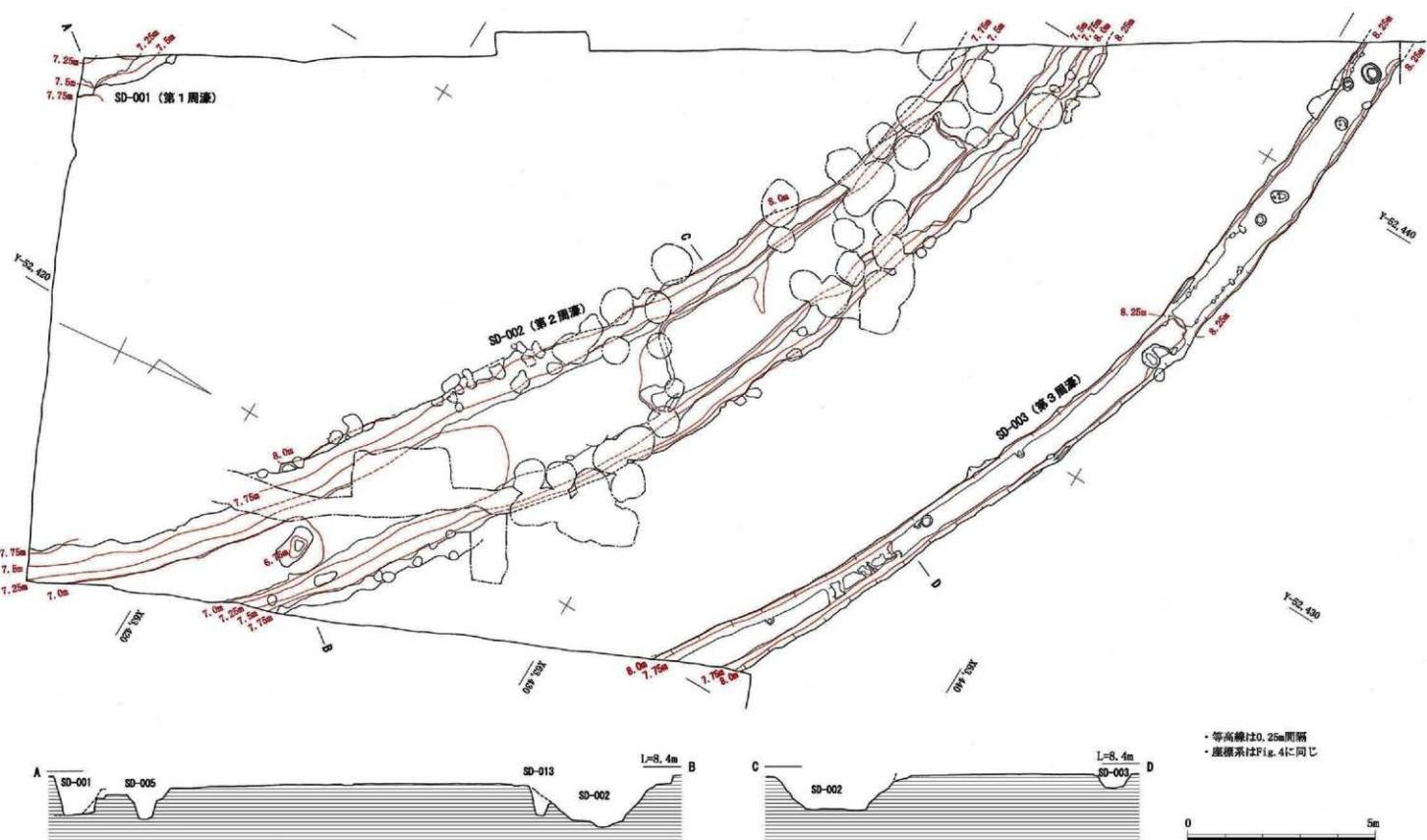


Fig. 12 東光寺剣塚古墳第1～3周塚(1/100)

(3) 東光寺剣塚古墳の周濠

SD-001～003は東光寺剣塚古墳後円部に沿って環状に並走する溝で、第15・78次調査成果から古墳外周を三重に巡る周濠に相当することが確実である。SD-001が最も内側の第1周濠、SD-002が第2周濠、SD-003が最も外側の第3周濠である。出土遺物は各遺構の中で報告するが、埴輪は古代～近代の遺構からも多数が出土したため末尾にまとめた。

SD-001（第1周濠） Fig.12・13、PL.3

I区南西隅に検出した。東光寺剣塚古墳後円部に向かって落ち、平面形は古墳に沿って概ね弧状をなすが、後世の改変が著しい。外縁で3mの長さを測り、検出面から深さ0.7mで、底面は古墳に向かって緩く下る。土層図に示すように調査区南壁では断面が逆台形状をなすが、底面まで暗灰褐色土と地山ロームブロックを主とする土で一気に埋められており、プライマリーな層は存在しない。第78次調査の所見にもあるように、本来の濠のラインはもっと古墳より巡っていたものと考えられる。

SD-001出土遺物

須恵器、埴輪、瓦質土器、陶器器、瓦等、近世までの遺物が出土したが図化できる遺物はない。

SD-002（第2周濠） Fig.12・14～16、PL.1・3～6

I区南半を環状に巡る周濠である。北西～南東に弧を描くが、以下では便宜上、西～東と読み替えて説明する。近世墓造営と改葬により、一部で濠底面以下にまで破壊が及ぶ。東端は古代の溝SD-013・土坑SK-016、近世溝SD-004に切られしており、濠内縁には木根とみられる小ピットが多数ある。

直線距離で32.5mの長さを確認した。SD-001外縁と約11mの距離を置いて落ち始め、横断面形は概ね逆台形をなす。検出面の標高は西端で8.2m前後、東へ僅かに傾斜しており、東端で8.0m弱となる。幅は上端で3.0～4.0m、下端で1.2～2.1mを測り、東西両端がやや狭く中央部が広い。深さは0.7～1.15mで、中央部がやや浅い。底面の標高は7.1～7.3mで、東側では6.8～6.95mとなり、検出面同様東へやや低くなる。第15次調査によると、第2周濠の横断面形は古墳南側では逆台形だが、北側ではV字形に近くなっている。幅や断面形状に差違の大きいことが指摘されており、今回の所見と合致する。なお、SD-002は正円とはならないが、復元推定図（Fig.42）から想定される濠外縁の直径は92m前後となる。

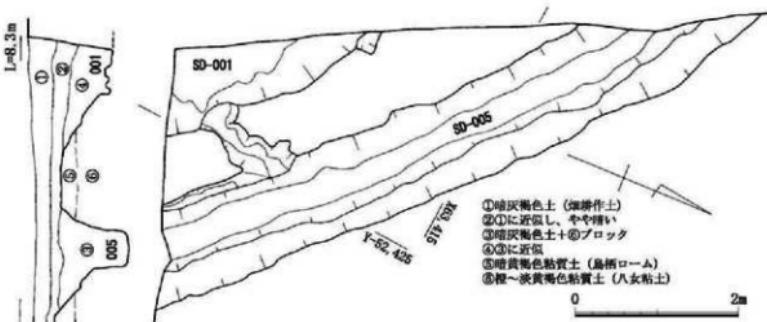


Fig. 13 SD-001(第1周濠)と005(1/60)

遺物は上中下の3層に分けて取り上げたが、上層には9世紀初頭までの遺物が含まれており、古代溝SD-013はこの層の下面から掘り込まれている(Fig.16 Q-R)。古代までは周濠としての外観を留め、

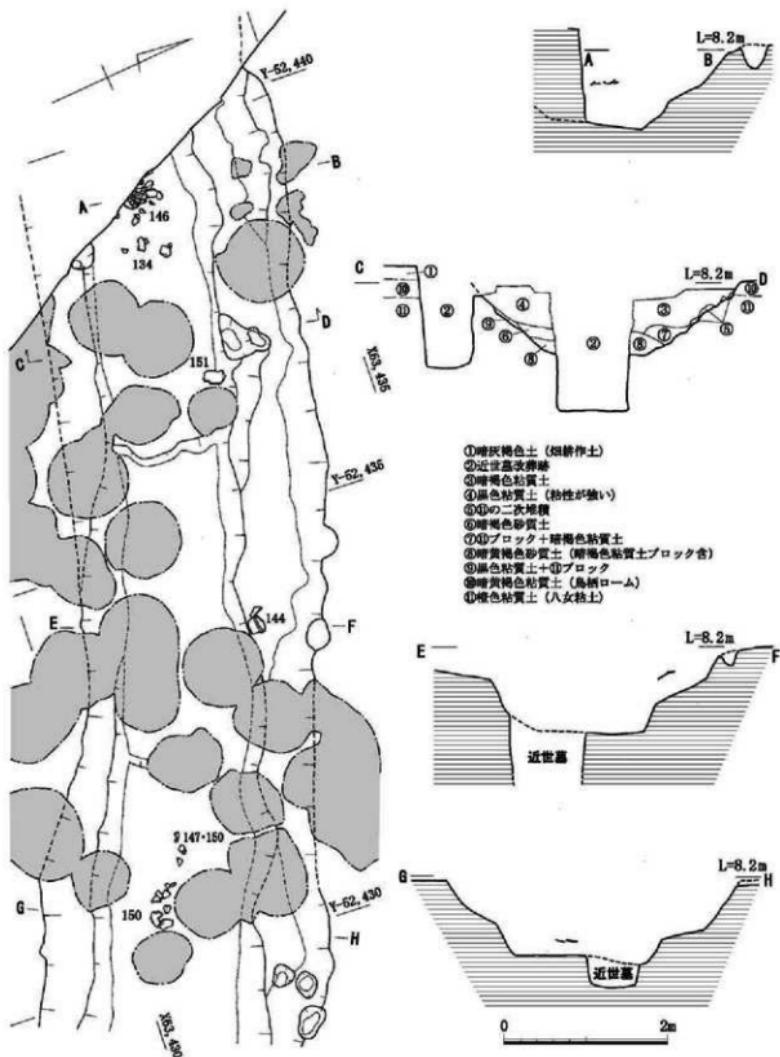


Fig. 14 SD-002(第2周濠)西部遺物出土状況 (1/60)

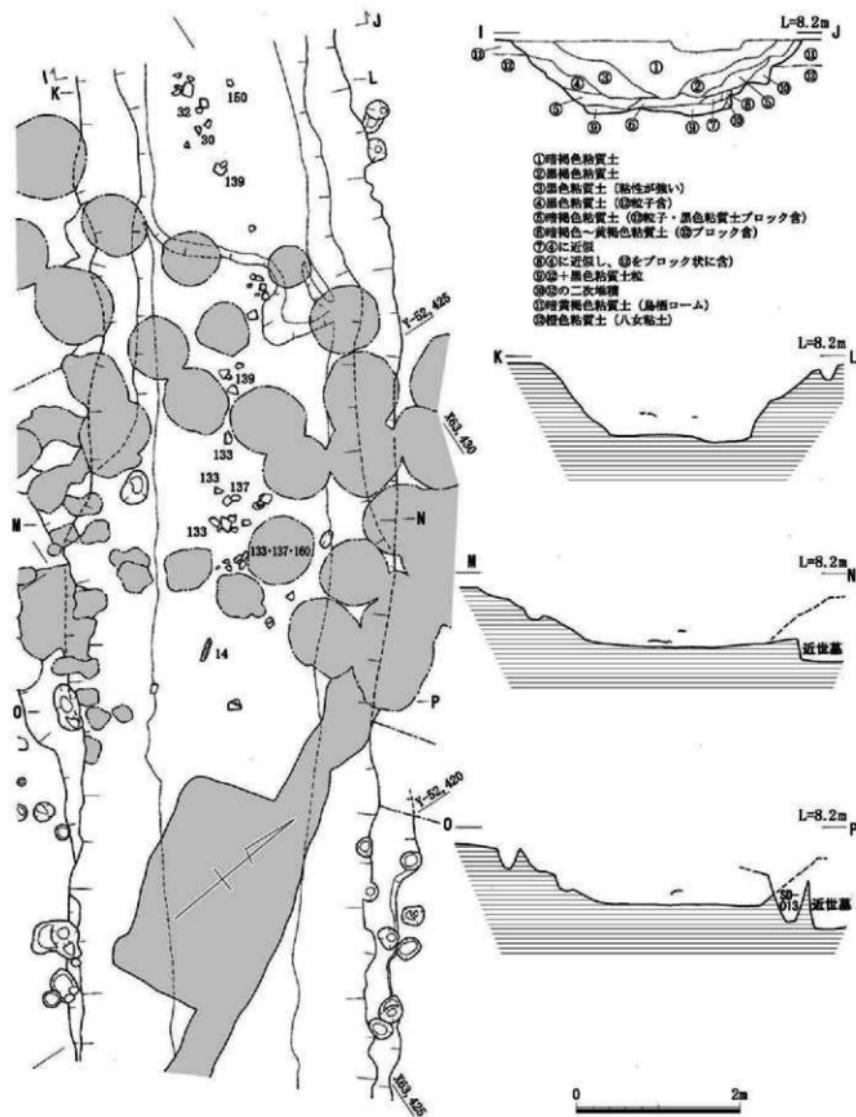


Fig. 15 SD-002 (第2周濠) 中央部遺物出土状況 (1/60)

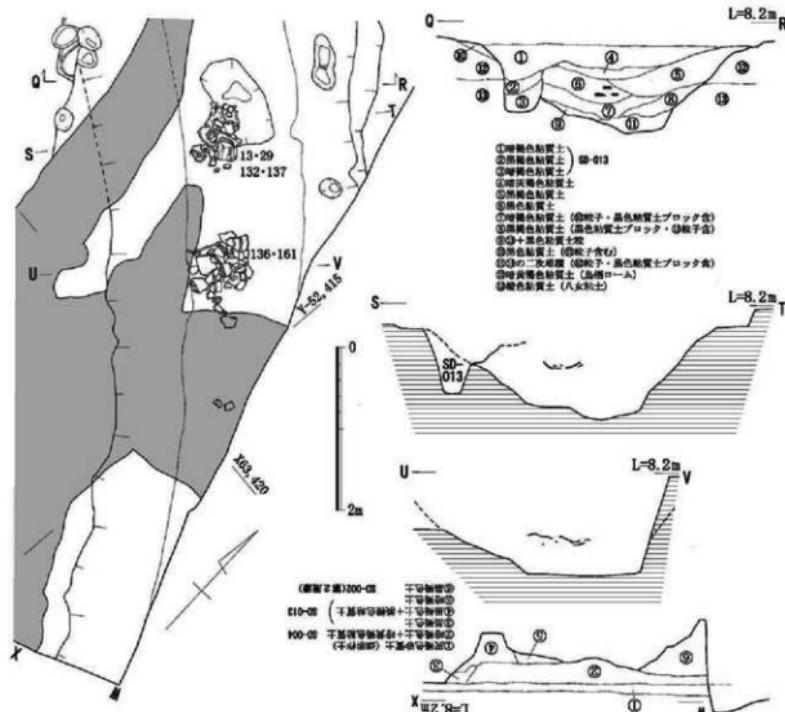


Fig. 16 SD-002(第2周濠) 東部遺物出土状況 (1/60)

明瞭な窪みとして残っていたのであろう。中層では埴輪がまとまって出土した。埴輪は少片が底面に近い位置で出土したものもあるが、特に個体がまとまって出土した東西両端では底面から40~50cmほど浮いている。下層は遺物量が少ないが、弥生土器などに混じって鉄鏃が出土している。

SD-002出土遺物 Fig.17, PL.10

甕棺を含む弥生土器、須恵器、土師器、埴輪、石製品、鉄製品など、弥生時代から古代までの遺物が出土した。埴輪が最も多い。図中の番号の右に出土層位を示した。図示していないが、他に青磁片など中世以降の遺物が数点含まれており、近世墓等から混入したものと思われる。

13~15は弥生土器の成人甕棺片で、他に未報告分が1点ある。口縁横ナデ、内面ナデ、外面は調整痕が残らない。いずれも橙褐色を呈し、胎土に粗砂混じりの細砂粒・雲母粒を含み、焼成不良。

16~32は須恵器である。16は坏蓋で、九州須恵器編年のIVa期後半か。17は坏身で小片に過ぎない。18は扁平な鋸が付く坏蓋で、VII期。19は坏身で、IVb~V期。20~21も坏身で、VII期以後。22~25は高台付坏で、VII期。以上の蓋坏は、色調は淡灰青~灰黒色、胎土は精良で、焼成良好。ロクロ回転方向の分かるものでは、19~21・22が時計回り、18・23~25が逆時計回りである。26は低脚の高台で、中位に沈線2条が巡り、内外面に螺旋状に絞り上げた痕跡がある。黒~灰色を呈し、胎土に微砂粒を少

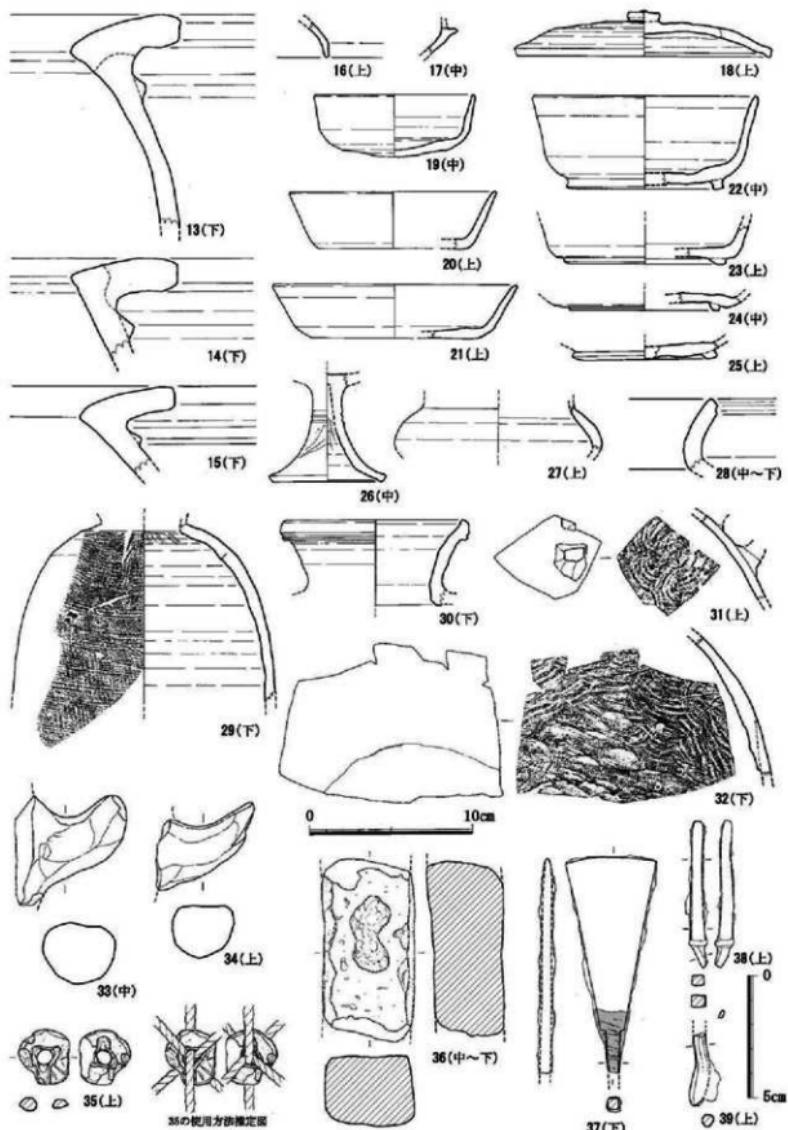


Fig. 17 SD-002 (第2周溝) 出土遺物 (37~39は1/2、他は1/3)

量含み、焼成良好で半身に灰（自然釉）を被っており、寝せて焼成したか。IVa期後半～IVb期か。27は小壺であろう。逆時計回りの回転横ナデで、灰青色を呈し、胎土に細砂粒を少量含み、焼成不良で外面に灰が掛かる。28は壺の口縁部小片で、端部に凹線・沈線を各1条回す。回転横ナデで、黒～灰褐色を呈し、粗砂を少量含み、焼成良好で内面に灰を被る。29は特異な器形をなすが、接合する破片のうち2点が下層から出土しており、古墳時代の須恵器とみられる。外面は上半が斜～横の、下半が縱のタキで、カキ目状の回転横ナデを加えてナデ消し、一部にナデを加える。内面は当て具又は指押さえ痕があり、横にナデ消す。灰青色を呈し、胎土に細砂粒を僅かに含むが精良で、焼成はやや甘い。30～32は同一個体とみられる提瓶である。口縁は外反して開き、端部は肥厚して断面三角形をなす。肩部に痕状の把手が・がれた痕跡があり、胸部は外側から粘土円盤を貼付する。口縁は回転横ナデ、胸部内面は上半に同心円文、下半に弧状文の当て具痕があり、粘土円盤の周辺には棒状工具を押し当てた痕跡が残る。外面は自然釉が被り調整不明である。釉は頸部を横に流れており、少し傾けて焼成したとみられる。淡灰色を呈し、細砂粒を少量含み、焼成不良。IIIa期か。

33・34は土師器瓶把手である。ヘラ整形し、淡黄～灰褐色を呈し、胎土に細砂粒を含み、焼成不良。

35は滑石製品で、中央の孔の周囲に紐擦れによると思われるY字形の窪みがある。窪みは表裏で形が反転しており、図に示すような使用方法が考えられる。36は砥石で、上下が折れる。四側面を使用するが、裏面の研磨痕は軽微である。表面の中央が錐んでおり、欠損後に台石に転用したものか。

37～39は鉄製品である。37は方頭斧箭式鉄鎌で、アミで示した部分に樹皮痕が残る。下層出土。38は方柱形で先端は尖らず、関以下は捻れる。先端の折れた鉄鎌であろうか。39は細棹状のもので、針か。38・39は上層から出土しており、古代の遺物かもしれない。

下層出土の須恵器は古墳築造頃（IIIa期）のものと思われ、中層は少し下る時期（IVa期後半～V期）のものが多く、中層の一部から上層にかけて古代（VII期以降）の須恵器・土師器を多く含む。

SD-003（第3周濠） Fig.12・18、PL.1・4・6・7

畑耕作により若干の破壊を受ける。直線距離で26m分を確認した。SD-002外縁との間隔は東で5.0m、西で5.6mを測り、厳密には平行していない。第15次調査の報告にもあるように、二つの周濠は同心円ではなく多少のずれがあり、今回検出した範囲の中間あたりに溝の方向が少し変わる変換点が認められる。幅は最小0.9m、最大1.4mで、1m前後の数値を示す部分が多い。遺構検出面の標高は西端8.4m、東端8.1m、濠の深さは西端23cm、東端46cmで、東へ傾斜するが、東半部で底面が部分的に深くなるところがあり、最深58cmを測る。底面の標高は8.1～7.5m、横断面形はおおむね逆台形で、底面幅0.3～1.0m。SD-003も正円とはならず、復元推定図（Fig.42）から想定される周濠の直径は外縁で107m前後となる。覆土は黒褐色粘質土が主体である。SD-002に比べると出土遺物は極端に少ないが、西半部では底面から10cmほど浮いた位置から馬齒が出土した（鑑定結果はP36参照）。

SD-003出土遺物 Fig.19、PL.10

甕棺片を含む弥生土器、土師器、埴輪、砥石が出土した。他に近世陶器・青花片が数点あり、畑耕作による擾乱からの混入遺物とみられる。

40・41は弥生土器成人甕棺の口縁部片である。器面の残りが悪いが内面ナデ調整で、口縁内外横ナデ調整であろう。ともに暗橙褐色を呈し、粗砂混じりの細砂粒を含み、焼成良好。42は土師器高坏で、脚部の残欠である。摩滅するが内面にヘラ調整痕を留める。明橙色を呈し、胎土は精良、焼成良好。

43は砥石の一部で、破面を除く三側面に使用痕がある。44も砥石片で、中央部が浅く窪む。

古墳築造時期を大きく下る遺物がなく、第3周濠は早い段階で埋没したものと考えられる。

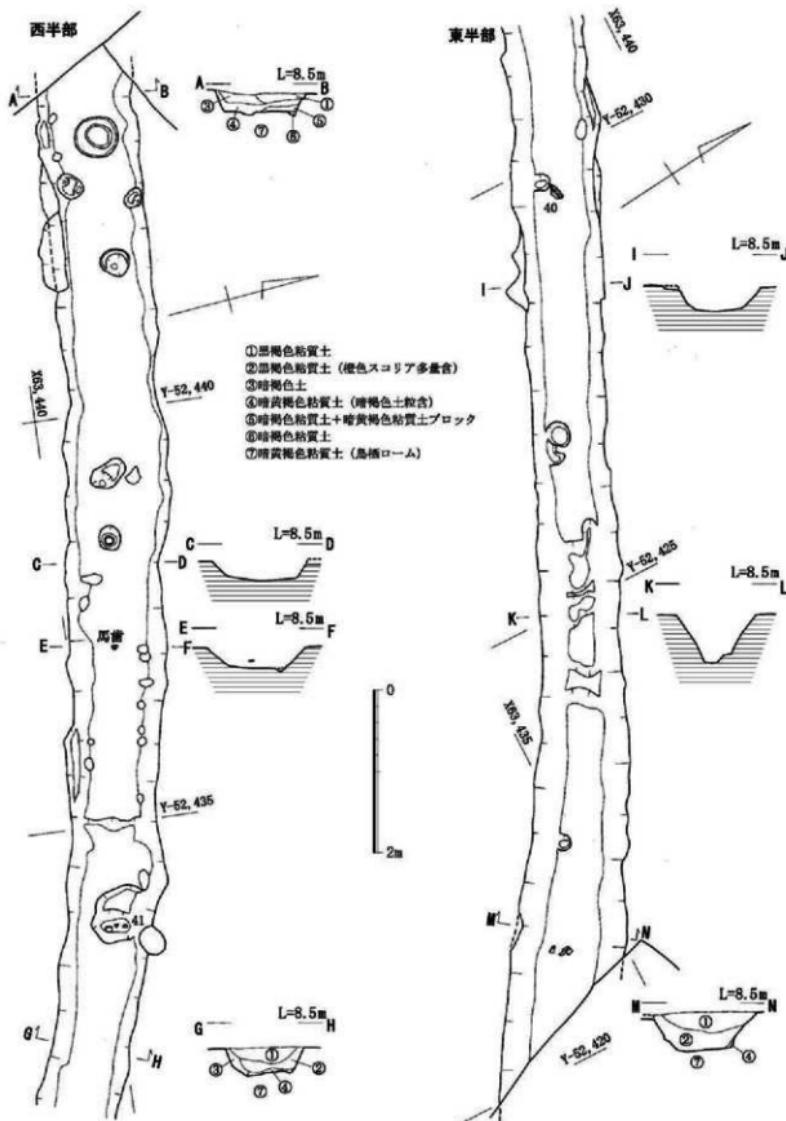


Fig. 18 SD-003(第3周濠)遺物出土状況 (1/60)

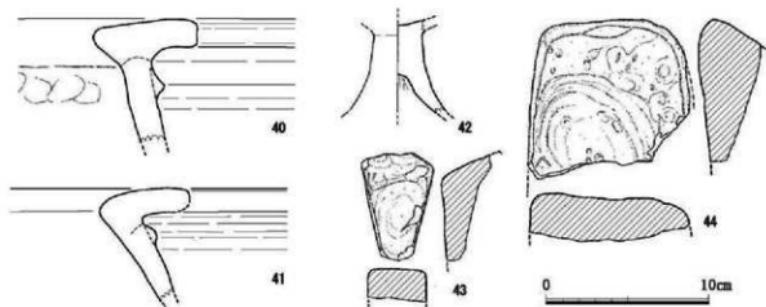


Fig. 19 SD-003(第3周濠)出土遺物 (1/3)

(4) その他の溝

SD-004 Fig.20, PL.8

I区南端に検出した。SD-002・013を切る。溝のコーナー部と思われ、南側と東側はそれぞれ調査区外へ伸びる。調査区内では西へ北岸のみを確認しており、対岸は調査区外にあり、溝幅は不明である。土層図に示すように断面形は逆台形で、深さ30cm、底面は平坦で凹凸がある。水の流れた形跡はない。

SD-004出土遺物 Fig.23

弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、土師質土器、陶器、白磁、青磁、青花、肥前系染付、瓦、滑石片が出土した。

45は古代の須恵器壺身で、低い高台が付く。淡灰青色を呈し、胎土は精良で、焼成良好。46は土師質土器の釜。胴部外面ナデ、内面横刷毛目、口縁内外横ナデ調整で、外面に印花文を連続してスタンプする。器表面に炭素が付着して黒褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好。47は明代白磁碗で、口縁は外反する。48・49は肥前系染付碗である。

近世の溝であろう。

SD-005 Fig.13, PL.1

SD-001の北側に位置し、0.7~0.9mの間を置いてSD-001と並走する。8.3mの長さを検出し、幅1.1m、深さ0.9m。横断面形は下部が箱堤状をなし、上部で開く。覆土及び出土遺物はSD-001と近似している。SD-001との間に浅い溝でつながる部分があり、切り合いでSD-005がある程度埋まった段階で、SD-001からSD-005へ流れ出した水によって抉られた痕跡とみられる。第1周濠は中世のある段階で再掘削されて近世まで溉漑用溜め池となっており、古墳前方部北側隅から北方へ導水する水路も確認されている。SD-005もこのような中~近世の農業用水路の一部とみられる。

SD-005出土遺物 Fig.23, PL.10

須恵器、埴輪、瓦、白磁などが出土した。

50は須恵器壺で、外面は灰被りで調整不明。肩に沈線2条を回し、沈線間を櫛齒状工具により連続刺突して充填する。内面は頸部ナデ、他は回転横ナデ。51は須恵器壺の口縁部小片で、外面に突線1条を巡らし、横カギ目の後、ヘラで斜めに沈線を連続して施す。52は陶器又は須恵器の壺か。端部外面が肥厚して段をなす。上面に灰を被り、口縁部であろう。53は明代の白磁皿で、豊付を釉・ぎする。

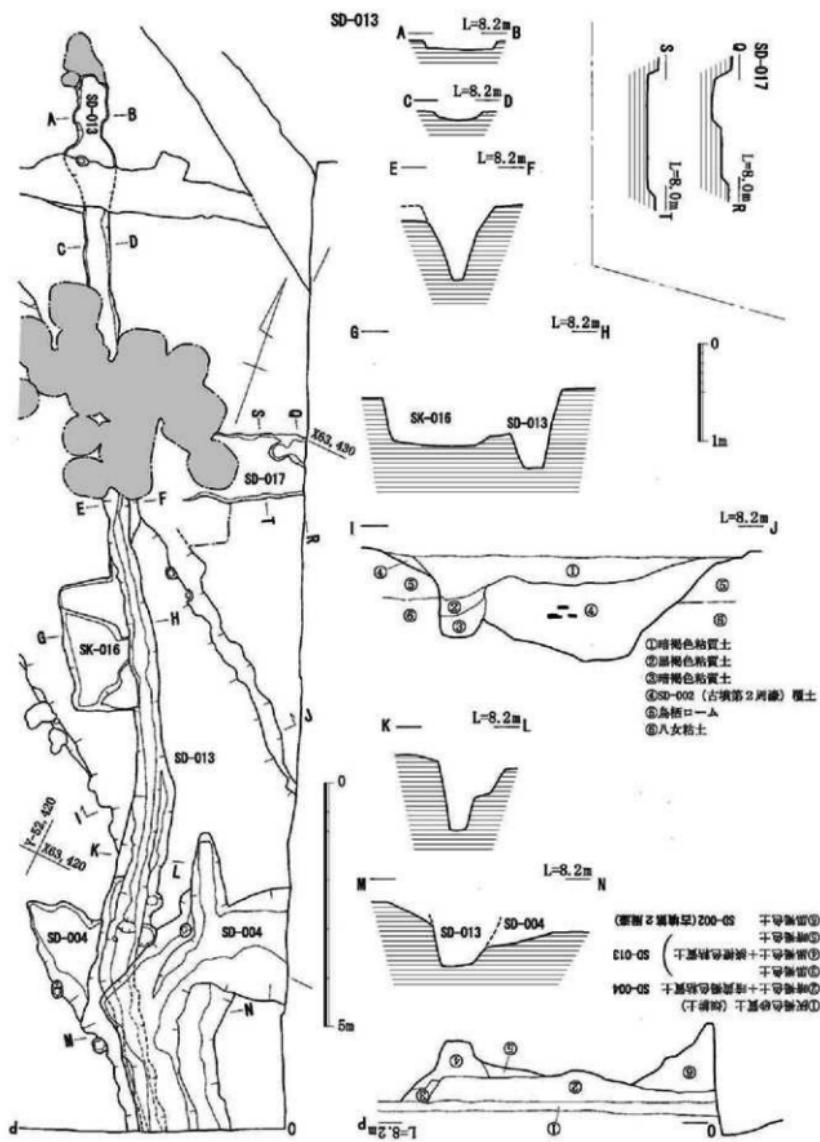


Fig. 20 SD-004・013・017(平面図1/100、他1/50)

SD-013 Fig.20, PL.8

I 区南半部に位置する。長さ23mを検出したが、北半は近世墓による破壊が著しい。北端でSD-022を切るが検出時には切り合いをつかめなかつた。第2周濠SD-002に切り込むが、既に述べたように濠の上層下面から掘り込まれておらず、SD-013が掘られる頃まで第2周濠は明瞭な崖みとして残っていたと考えられる。また、後述する土坑SK-016とは切り合いが無く、一連の造構であると思われる。SD-013は蛇行しているが、主軸方位は磁北から24°ほど西偏し、幅は残りの良い部分では約1m、他は削平により0.5mほどになる。横断面形は逆台形を呈し、最深部で90cmの深さに及ぶ。SK-016に接するあたりが最も深く底面標高6.8mで、南端では7.3mまで浅くなり、北側は8.0mを超えるまで上昇し、浅くなつて消滅している。覆土は黒褐色粘質土で、SD-002に近似している。

SD-013出土遺物 Fig.23

弥生土器、土師器、須恵器、埴輪がある。上層から明白白磁・青磁・青花、肥前系染付が出土しており、近世墓やSD-004からの混入があつたとみられる。

54～58は須恵器蓋坏で、ロクロ回転はいずれも時計回りである。54は蓋で、端部は僅かに下に垂れる。天井部の大部分に回転ヘラ削りを加える。淡灰色を呈し、胎土に細砂粒を含むが精良、焼成良好。55は坏身で、回転横ナデ調整。淡灰色をなし、胎土は精良で、焼成良好。56も坏身で、外底は回転ヘラ削り。黒～灰青色で、胎土は細砂粒を多めに含み粗、焼成良好。57は高台の付く坏身で、回転横ナデ調整。灰黒～淡灰青色を呈し、胎土精良、焼成良好。58も高台付き坏身で、回転横ナデ調整。淡灰色をなし、胎土は細砂粒を僅かに含むが精良、焼成良好。

59は砥石で、図の正面と左侧面に作業面を持つ。硬質砂岩製。60も砥石で、側端に偏して縦位の溝が巡り、一部は裏面に回り込む。あるいは鍤に転用したか。平坦面は砥石として使用する。砂岩製。

8世紀～9世紀前半頃の構か。

SD-017 Fig.20

I 区南半部に検出した。東西方向の溝とみられるが、東側は調査区外へ伸び、西側は近世墓に破壊されており、一部を確認したのみである。幅1.1～1.3mで、横断面形は逆台形、深さ20cmである。

SD-017出土遺物 Fig.23

図示した須恵器のほか、土器小片数点が出土した。

61は須恵器坏で、断面長方形の高台が付く。摩滅するがロクロ回転は時計回りであろう。淡灰青色を呈し、胎土精良、焼成良好である。

古代の土器が出土しているが、覆土から中世以降の溝と考えられる。

SX-027・028 Fig.21, PL.8

I 区東隅に検出した北東～南西方向の浅い溝状の崖みである。SX-027は平面プランが若干弧状となるようにもみえ、覆土に須恵器が含まれていたため検出時には円墳等の地山整形の一部かとも考えたが、南東側のII区では延長が確認できず性格不明である。調査区内で長さ5m、幅0.6～1.0m、深さ10cm強。SX-028はSX-027の弧の内側に検出した浅い崖みで、やはりII区には伸びていない。長さ2.5m、南東に落ちて対面の立ち上がりは調査区外にあり、幅は不明。深さ5cmである。

SX-027・028出土遺物 Fig.23

SX-027からは弥生土器の他、須恵器2点が出土した。SX-028は遺物が出土していない。

62は須恵器坏身で、蓋受けの立ち上がりは低く内傾する。ロクロ回転は時計回りか。暗灰青色を呈

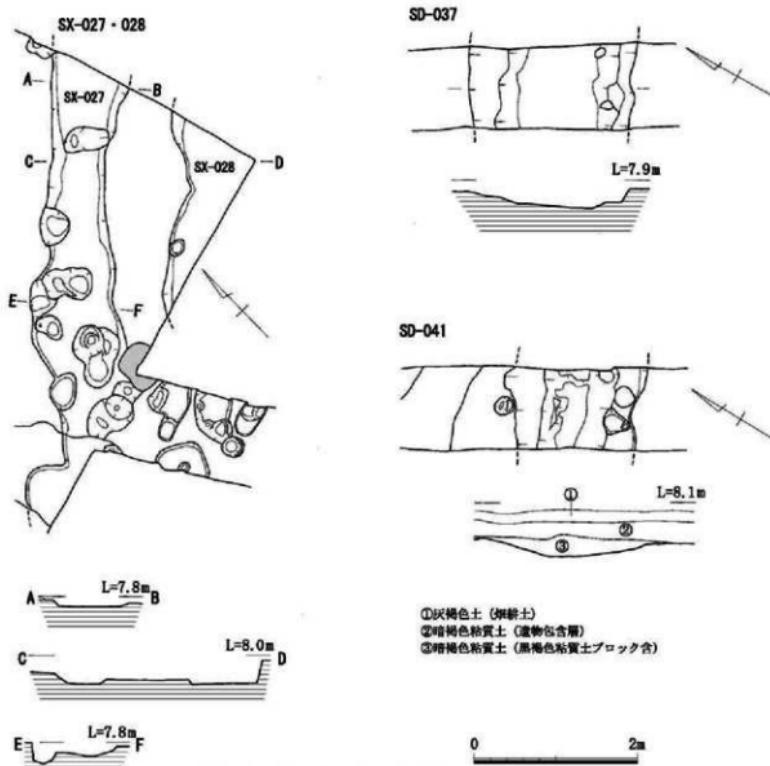


Fig. 21 SX-027・028, SD-037・041上層 (1/60)

し、微砂粒を僅かに含み、焼成良好。小片のため不正確だが口径は10cm前後で、九州須恵器編年のIVa期後半か。63は大型器種の一部で、斜方向のカキ目を帯状に残して横方向のカキ目を加え、更にヘラで沈線3本を刻む。灰青色を呈し、胎土に細砂粒を少量含み、焼成不良。外面は灰を被る。

SD-030 Fig.22, PL.8

I区北隅に位置する。東及び北方向に伸びる溝の屈曲部にあたるとと思われる。東西6.9m、南北5.6mで、東と北へ落ちており対岸の立ち上がりの形跡は認められない。深さ1.1mで、側面は段をなして緩やかに落ち、底面は平坦である。中世後期の窯と考えられる。類似遺構を近隣の第28次・36次調査でも検出しており、それらは現在の住居区画に近い方向を示している。これらは中世後期の居館に關わるものとみられるが、いずれも一部を確認したに過ぎず全体像は不明である。

SD-030出土遺物 Fig.23, PL.10

弥生土器、古式土師器、須恵器、埴輪、中世土師器、白磁、青磁、陶器、瓦、銅錢、砾石、黒曜石

が出土した。

64は弥生土器の無頬壺である。口縁に孔の痕跡はない。器面が、落し、頸部外面に横ナデ痕と丹塗りを留めるのみ。橙褐色で、丹は暗赤色、胎土に細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好で2ヶ所に黒斑がある。65は古式土師器で、布留系の甌。口縁は内湾して開き、頸部内部指印さえ、胴部内部へラ削りで、他は調整痕が残らない。淡黄褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好。66も古式土師器で、庄内～布留系の二重口錐壺。頸部下面をナデ、口縁は横ナデ調整。橙褐色で、胎土に細砂粒・雲母粒を多量、黒色鉱物を僅かに含み、焼成は良好である。

67は中世の土師器壺で、底部は糸切り離しである。淡橙褐色で、胎土に雲母粒を多量に含むが精良で、焼成良好。68は明代の龍泉窯系青磁碗で、疊付から内面まで厚く施釉する。69は明代ピロースク

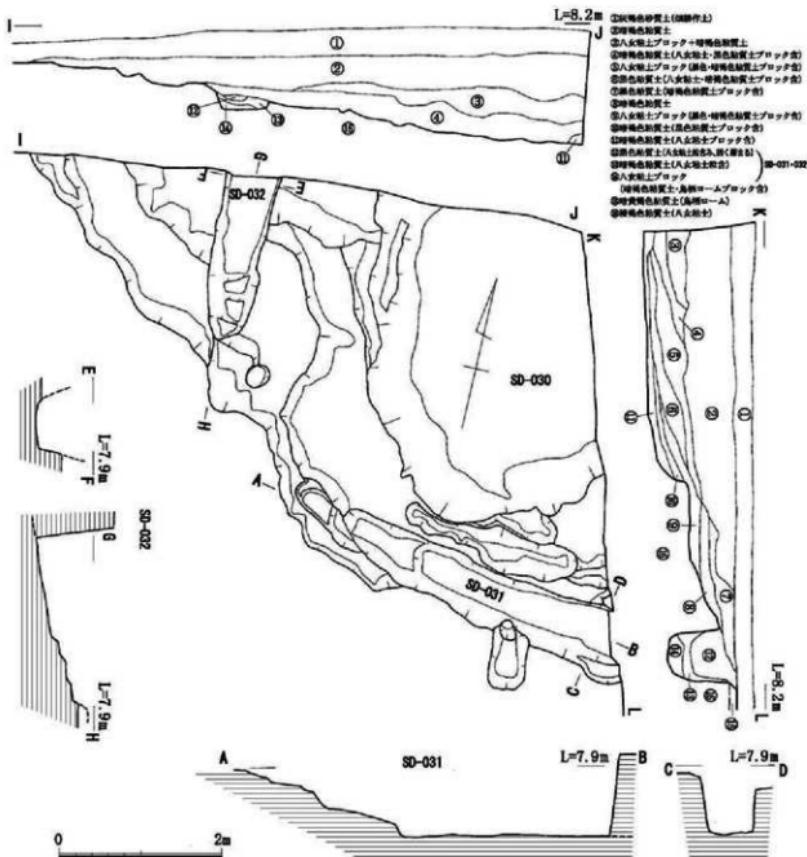


Fig. 22 SD-030・031・032 (1/60)

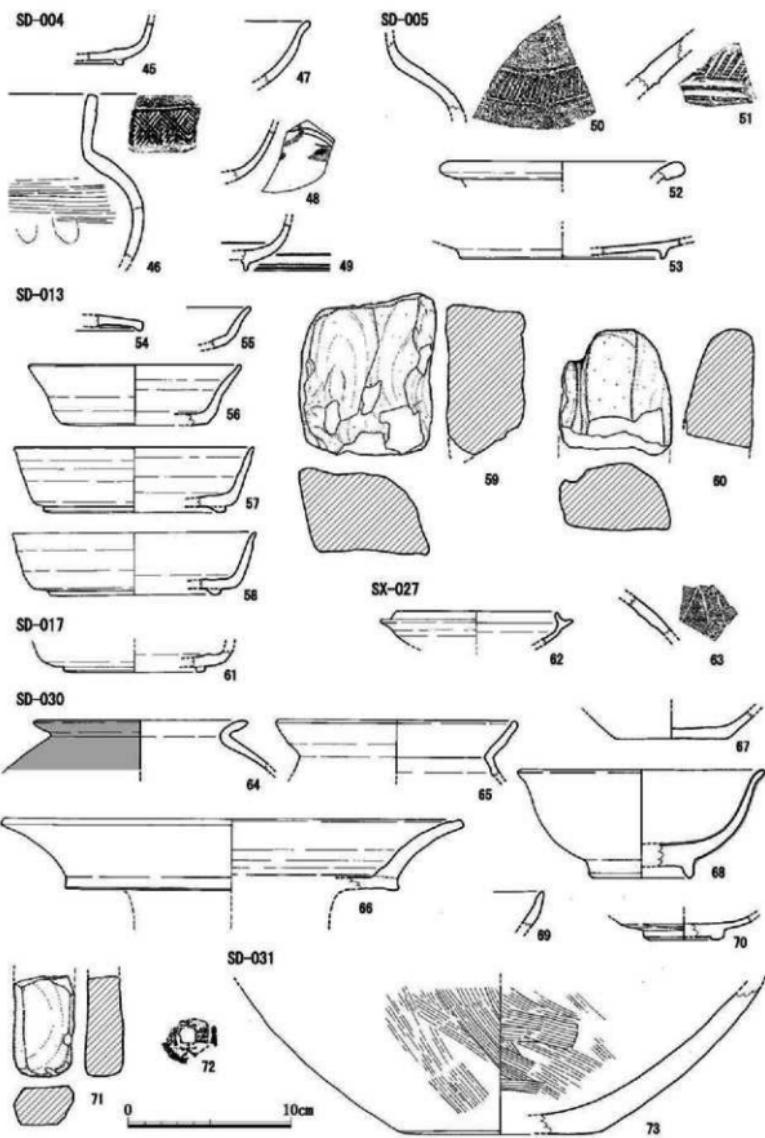


Fig. 23 その他の溝の出土遺物 (1/3)

タイプの白磁碗の小片である。口縁はやや内湾する。70は明代の白磁皿の底部片で、高台脇から外底は露胎である。

71は砥石で、上端は欠けている。小口面以外の全側面を砥石に使用している。硬質砂岩製。72は銅鏡で、残りが悪いが図版に示したソフトエックス線撮影で「至大通宝」(初鑄1310年)と判読した。

下層から明代の龍泉窯系青磁(68)が出土しており、15世紀前半頃の器であろう。また、古式土師器はSD-030の下層に検出したSD-031・032に本来伴うものであった可能性が高い。

SD-031・032 Fig.22, PL.8

SD-030の完掘後に現れた遺構である。SD-031と032は同一の土層堆積状況を示しており、同時期の遺構と考えられる。SD-031は東西、SD-032は南北に伸びており、前者は西に向かって、後者は南に向かって階段状に浅くなり、上部が削平されていなければ南東側で矩形につながっていたのかもしれない。仮に昇降路であれば、SD-030との関連が考えられるが、明らかにSD-030に切られており、出土土器にも中世に下るものはない。SD-031は長さ4.5m、幅0.7m、深さ0.8m、SD-032は長さ2.1m、幅0.6m、深さ0.6mを測る。遺構覆土は黒色粘質土で、SD-030とは明らかに異なる。

SD-031・032出土遺物 Fig.23, PL.10

弥生土器の他、土器小片が数点出土した。

73は壺の底部であろう。丸底気味の不安定な平底で、胴部外面は斜刷毛目、内面は横刷毛目、底部外面は刷毛目調整である。淡橙褐色～淡黄褐色を呈し、胎土に粗砂混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良である。

SD-030出土の65・66はこの遺構から遊離した土器と思われる。古墳時代前期の遺構であろう。

SD-037 Fig.21, PL.2

II区西側に一部を検出した。幅1.9～2.1m、深さ20cmを測り、横断面形は逆台形を呈する。覆土は暗褐色粘質土で、埴輪、須恵器、中世土師器、青花が少量出土したが図示できるものはない。中世の溝であろう。

SD-041(上層) Fig.21, PL.2

SD-037の南東に3m離れて位置する。2条の溝が重複しており、下層は古墳時代前期の溝である。幅2.0～2.2m、深さ20cmで、横断面形は浅い逆台形をなす。土器片、須恵器が僅かに出土したが、図示できるものはない。中世の溝であろう。

(5) 井戸 SE-039 Fig.24, PL.8

井戸は1基のみを検出した。SE-039はII区のほぼ中央に位置し、全体の1/2は調査区北外へ伸びるが、隅丸方形プランをなすものであろう。径1.05mで、ほぼ直立に掘り下げており、上端でやや広がる。遺構検出面からの深さは1.3mと浅く、土坑の可能性もある。溝SD-040と切り合うが、土層観察によりSD-040が完全に埋没する前に掘られたことが分かる。土層図に示す⑦⑧層はSD-040の覆土、④～⑥層はSE-039の覆土で、SD-040上層に堆積した③層がSE-039の内部にも入り込んでいる。

出土遺物 Fig.25

弥生土器、古式土師器が30片ほど出土した。

74は弥生土器の甕である。逆「L」字形に屈曲する口縁部片で、口縁直下に断面三角形突帯を1条貼付する。屈曲部外面には横ナデの痕跡を留めるが、それ以外は摩滅して調整不明。黒褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好。

75～77は古式土器の甕で、いずれも頸部から屈曲して開く口縁部の小片である。75は摩滅して調整不明だが、胴部内面に僅かにヘラ削りの痕跡を認める。橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成不良で破面が黒色を呈する。76も器面の残りが悪いが、胴部外面にタキの痕跡がかすかに残る。褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成不良で破面が黒色をなす。75・76は器形が若干異なるがその他の特徴は類似しており、同一個体かもしれない。77は器壁がやや厚手である。摩滅のため調整痕は観察できない。淡橙色を呈し、細砂粒を多量に含み、焼成不良でやはり破面は黒色を示す。

古墳時代前期の遺構で、これが掘られる頃にはSD-040はかなり埋没していたと考えられる。

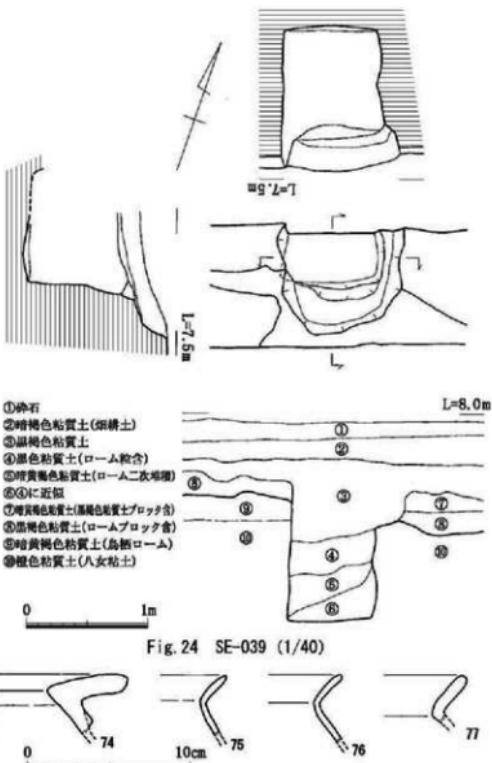


Fig. 24 SE-039 (1/40)

Fig. 25 SE-039出土遺物 (1/3)

(6) 飽棺墓 SK-033 Fig.26, PL.8・9

1基のみ検出した。古墳時代前期の溝SD-007を掘り下げていたところ、壁際で飽棺の一部を確認したため部分的に調査区を拡張した。ブロック崩ぎりぎりまで掘削したため、安全上、蓋棺の取り上げのみを主眼とし、1日で掘り上げて埋め戻した。Fig.26の土層図は当初の調査区壁際で作成したもので、蓋棺の胸部が見えている。①層は溝SD-007の覆土、②～③ないし④層までは蓋棺墓の墓壙覆土とみられるが、⑤～⑦層は墓壙にしては形状が不自然で、別の遺構である可能性が強い。すなわち、最初に土坑状の遺構があり、この埋没後に蓋棺墓が築かれ、最後に溝SD-007が掘られたという順序が考えられる。墓壙は調査区外へと広がっており、溝SD-007に切られるため掘り方の平面形は不明である。斜坑は北西へ向かって蓋棺の径ぎりぎりに掘られ、検出面から底面まで96cmを測る。底部には深黒色土が堆積し、汚れた地山土で埋め戻されていた。上甕の存在を示すような土器片は出土せず、おそらく木蓋と考えられるが、口縁部に粘土等は認められなかった。主軸方位は磁北より24° 西偏し、36° の傾斜で埋置されている。墓壙から79の小壺が破片となって出土しており、全体の1/2～2/3の破

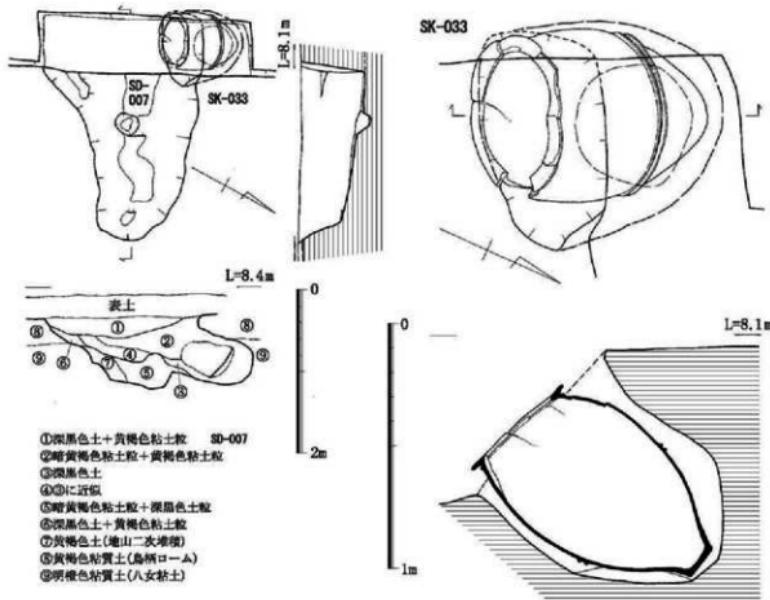


Fig. 26 SK-033 (1/20) と周辺の遺構 (1/60)

片があるが接合できない。発掘調査時には供試土器としては認識しておらず、後世に破壊されたか、破碎した状態で入れられたか、あるいは墓壙へ流入した遺物か区別できない。

出土遺物 Fig.27, PL.10

甕棺の他、墓壙から図示した弥生土器が出土した。

78は棺に用いた大型の甕である。口縁は逆「L」字形に屈曲してやや外反し、上面は内傾する。口縁直下に断面三角形の突帯を貼り付け、胴部下位に断面台形の貼付突帯二条を巡らせる。胴部最大径はやや上位にあり、口径を少し上回る。内外面とも丁寧なナデ調整だが、内面中位には板状の工具の小口圧痕が、外面下端にはヘラ状の工具の痕跡が残る。内面の口縁下と底部周辺に指頭もしくは當て具によるものと見られる浅い窪みが認められる。口縁部内外と突帯周辺には横ナデ調整を加える。橙褐色を呈し、胎土に石英等の細砂粒と雲母粒を少量含むが精良で、焼成良好。胴部中位の2ヶ所に黒斑がある。口径60.6cm、胴部最大径66.2cm、器高96cm。79は小型甕で、平底で肩が張り、頸部は内傾して立ち、口縁は外反する。器面の残りが悪いが外面下半に縱刷毛目、内面に指押さえ痕とヘラ状工具によるナデの痕跡を留める。明黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成良好。底部外面に黒斑がひとつある。80は甕で、口縁は「く」字形に屈曲するが内面は丸い。残りが悪いが外面は縱刷毛目、内面ナデ、口縁横ナデ調整であろう。淡褐色で、細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。81は高壺の口縁部片で鋸先形をなす。内面に丹塗り痕が僅かに残る。橙褐色で、胎土に雲母粒を多量に含み精良、焼成良好。

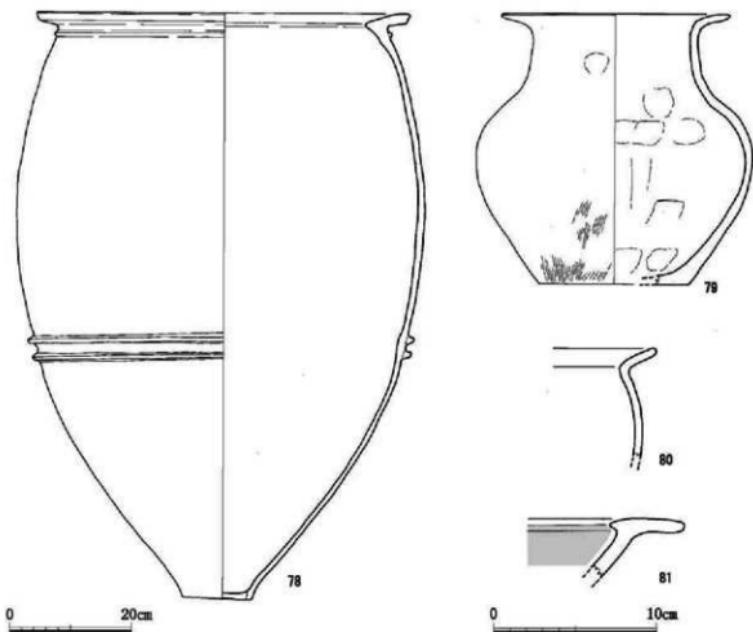


Fig. 27 SK-033出土遺物 (78は1/8、他は1/3)

(7) 土坑

SK-006 Fig.28

I 区南端の調査区西壁際に検出した。細長い隅丸長方形プランを呈し、長径1.25m、短径0.5m、深さ50cm。縦横断面とも袋状の台形を呈し、底面は長径1.36m、短径0.52mで上端よりも広く、杭痕状の浅い小ピットが約25ある。覆土は黒色のクロボク土である。遺構面が1mほど削平を受けていると考えられ、落とし穴の可能性が高い。土器小片が1点出土したが遺構の時期は不詳である。

SK-008 Fig.28

I 区の西壁際に位置する。東西に長い隅丸長方形プランで、長径1.08m、短径0.6m、深さ58cm。底面は西側が深く、東壁は緩やかに立ち上がる。土層の堆積状態から柱穴であると考えられるが、周囲にこれと対になる遺構は見あたらない。覆土から土器小片4点が出土したが図化できるものはない。

SK-009 Fig.28

I 区中央の西寄りに位置する。東西にやや長い隅丸台形プランで、北に広がる。長径2.4m、短径1.8m、深さ60cmで、断面形は逆台形を呈する。底面に地山土の節理があり掘り過ぎている。覆土は黒色土と地山ロームの混在土で、土器小片1点が出土したのみである。

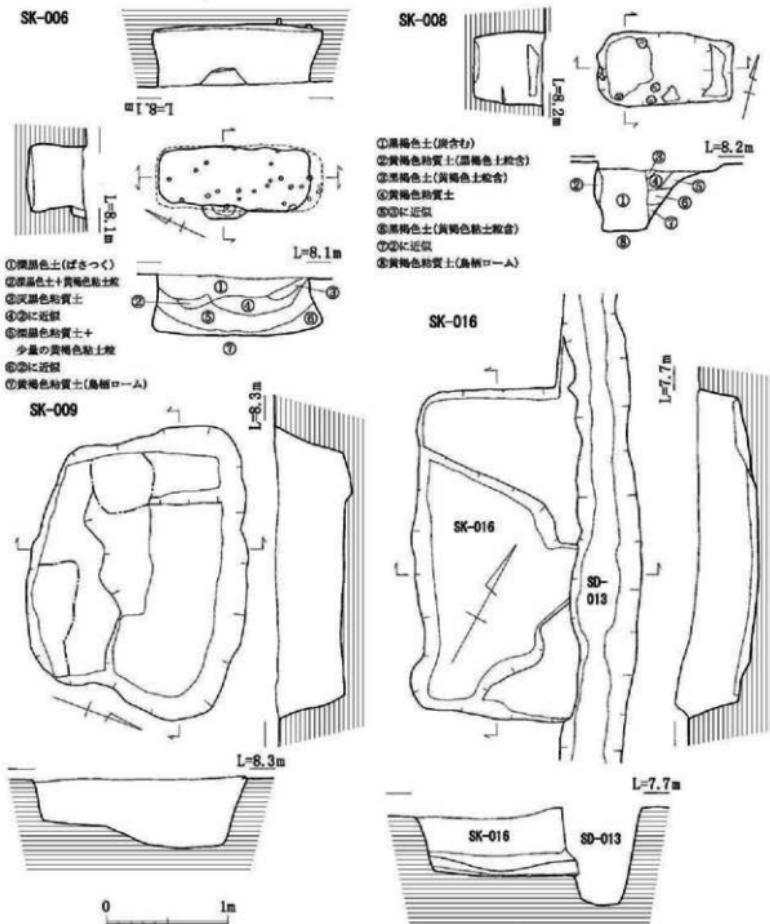


Fig. 28 SK-006 - 008 - 009 - 016 (1/40)

SK-010・025 Fig.29, PL.9

I区中央部に検出した南北に溝状に長い土坑である。南側は調査区外に伸びる。形状及び土層断面から複数の土坑が重複して生じた遺構と考えられ、最低でも4基が切り合う。西側に隣接しSK-010に切られる溝状の深い土坑SK-025があり、東側にも同様の遺構が認められるが、これらも切り合う土坑群の一部と考えられ、計6基以上の重複となる。SK-010の主軸方位は磁北から21.5° 西偏し、調査区内で長さ8.3m、幅は中央が狭く2.3m、南端で最も広く3.4mである。深さは中央部が浅く25cm、北側が70cm、南側が100cmで南北に深い。横断面形は逆台形をなす。SK-025は長さ3.8m、幅1.0m、深さ

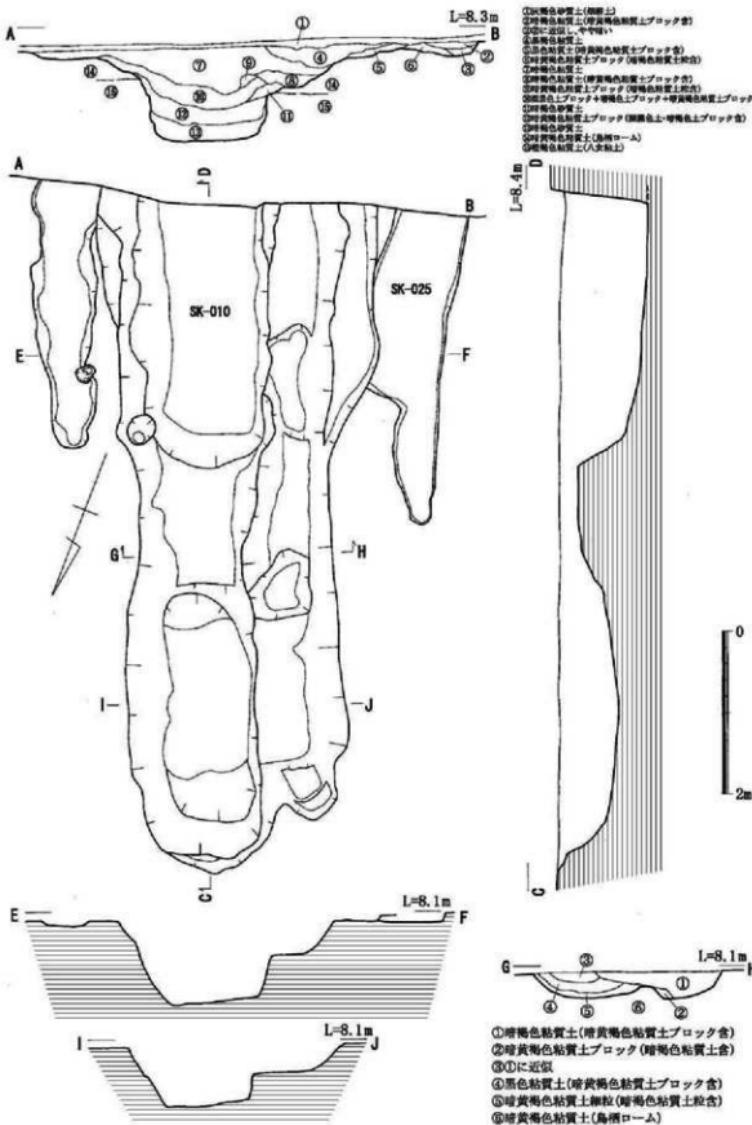


Fig. 29 SK-010 (1/60)

10cm。東側土坑は、長さ3.3m、幅0.8m、深さ5cm。同じ場所に繰り返し土坑を掘ったのであろう。

SK-010・025出土遺物 Fig.31

SK-010は弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、土師質土器、白磁、青磁などが出土した。SK-025からは埴輪1点、土器小片1点が出土したのみで図化していない。SK-010東側の土坑は遺物が無い。

82は弥生土器甕の底部片で、摩滅して調整痕は残らない。83は須恵器小片で、蓋か。底面はヘラ切りのまま未調整で、ヘラ記号を入れる。84・85は古代の須恵器壺で高台が付く。86は須恵器高壺の脚で、端部が下方に垂れ下がる。87は赤焼け須恵器の蓋であろうか。88は土師質土器の鍋で、口縁が屈曲内湾する。外面はナデ、内面は横方向の細かい刷毛目調整。暗橙色で、細砂粒と雲母粒を少量含み、焼成良好。外面は煤で覆われる。89は白磁皿で、見込みに片切彫りによる割花文を施す。全釉で外底は釉、ぎする。90は青磁の皿。腰折れで、口縁は稜花となろう。外面には継に深いヘラ彫りを施す。91は粉青沙器の碗で、白色の象嵌が入る。

中世後半の土坑とみられるが、遺物が少なく詳細時期は決めがたい。あるいはSD-030と同時期か。

SK-016 Fig.28, PL.9

I区南端付近に位置し、SD-013と同様、SD-002の覆土中に掘り込み面がある。平面形は隅丸長方形で南北に長い。東辺がSD-013と重複するが、切り合が無く主軸方位も合致するため一連の遺構と考えられる。長径2.7m、短径1.45m、深さ50cm。断面逆台形をなし、底面は平坦で南西側が一段深い。前に述べたが、SD-013はこの土坑のあたりで最も深くなってしまい、土坑底面より更に20cmほど深い。溝は集水、土坑は貯水を目的とする遺構であろうか。

SK-016出土遺物 Fig.31

甕棺片を含む弥生土器、土師器、須恵器、埴輪が出土した。

92は須恵器壺身で、底部ヘラ切りだが、ローリングを受けている。IVb期か。93は須恵器壺蓋で、天井部は低く、扁平な鉢が付く。口縁端部のかえりは断面三角形で、内面の境は明瞭である。クロ回転は時計回りで、外面の1/2に回転ヘラ削りを施す。94は土師器瓶の把手で、ヘラ整形。

8世紀代の遺構と考えられる。

SK-018 Fig.30, PL.9

I区西壁際の北寄りに位置する。平面形は南北に長い不整な隅丸長方形で、長径1.6m、短径1.2m、深さ65cm。断面形は逆台形をなすが、北西隅以外の隅部ではオーバーハングする。底面は平坦で、北西隅に浅い窪みがある。遺物は全く出土しなかった。

SK-019 Fig.30

SK-018の北側3mに位置する。いびつな梢円形プランで、長径1.3m、短径0.8m、深さ50cmである。断面形はすり鉢状をなす。SD-003に切られており、小児甕棺を抜き取った痕跡の可能性もある。

SK-019出土遺物 Fig.31

弥生土器など、土器小片が少量出土した。

95は弥生土器の甕もしくは鉢の底部であろう。底部外面は赤変し、内面に炭化物が付着する。摩滅するが内面ナデ調整か。淡黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。96は弥生土器の無頭壺である。器面は黒褐色を呈するがほとんど、落している。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好で外面に黒斑がある。弥生時代中期末頃の遺構であろう。

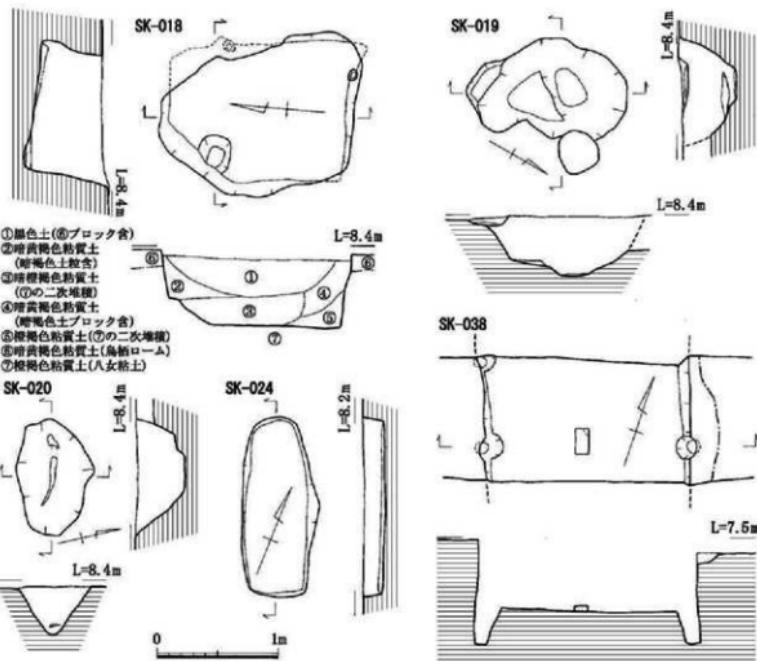


Fig. 30 SK-018・019・020・024・038 (1/40)

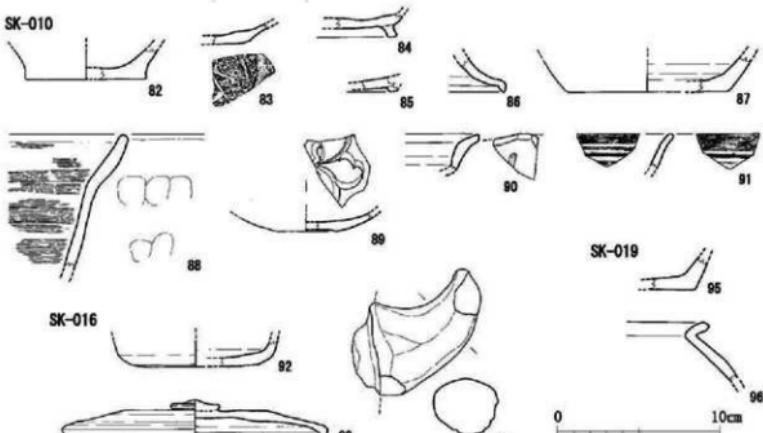


Fig. 31 SK-010・016・019出土遺物 (1/3)

SK-020 Fig.30

SK-019の0.5m北西に位置する。東西に長い不整な楕円形プランで、長径95cm、短径65cm、深さ38cm。断面形はすり鉢状をなし、底面は細長い。土器小片が3点出土したが図示できるものはない。

SK-024 Fig.30, PL.9

I区のほぼ中央に検出した。略南北方向に長い隅丸長方形プランで、長径1.47m、短径0.64m、深さ18cm。断面形は逆台形で、底面は平坦である。覆土は黒色粘質土でSB-026柱穴に近似しており、時期的にも近接するのであろう。弥生土器の小片1点が出土したが図示できない。

SK-038 Fig.30

II区東端で一部を検出した。箱状の掘り方を持ち、南北方向に伸びている。幅1.7m、深さ60cm。底面は平坦で、東西の壁際に30cmほどの深さの柱穴が並ぶ。肥前系染付、瓦などが出土したほか、底面にはレンガが1個置いてあった。東へ下る斜面付近に造られており、戦時中の防空壕跡と思われる。

(8) その他の出土遺物

近世墓（SK-101）出土遺物 Fig.32, PL.11

改葬漏れとなった壺棺墓が1基あり、小児骨とともに副葬品が一括出土したので報告しておく。
97～100は肥前系染付で、100は口縁の一部が欠けるが、他は完品である。97は紅皿で、貝殻状に型押しし、釉は内面から口縁端部までかける。98は蓋で、外面に魚文を描く。碗が含まれていないので皿として副葬したのであろう。99は手塙皿である。疊付を釉・ぎし、外底中央に砂粒が付着する。100も手塙皿で、見込みに梅花貼花文を施し、口縁内面を藍釉で縁取りする。101は木製の盆で、底板は三枚を組み合わせ、全面に薄く漆を塗る。102は木製の箸で、1本のみが出土した。この他、図化していないが銹着した鉄錢（寛永通宝か）5枚以上、鉄釘1本、及び同定していないが梅干し様の木の実1個が棺内より出土した。食物を盛りつけた器を載せた盆を供えて、早世した子供を悼んだものと思われる。103は棺に用いられた陶器の甕である。高64.6cm。墓壇は甕の径ぎりぎりに垂直に掘られ、蓋には幅広の平瓦一枚が被せていた。棺は記録後廻棄した。小児人骨についてはP49～52を参照。

肥前系陶磁の編年ではいずれも1820～1860年頃の製品とされており、江戸末期の墓と考えられる。

柱穴・近世墓改葬跡出土遺物 Fig.33

104～107は弥生土器で、104は甕の口縁部、105・106は底部、107は成人壺棺片である。108～112は古墳時代の須恵器蓋坏で、いずれも小型品である。108は蓋か。天井部はヘラ切り未調整でヘラ記号を入れる。109も蓋で天井部は丸い。110は蓋と身が自然釉により溶着したものである。111・112は身で、蓋受けの返りは低く内傾する。113～115は古代の須恵器蓋坏である。113は蓋で宝珠状の鉢が付く。114も蓋で端部の返りは退化している。115は坏で高台が付く。116は須恵器の蓋で古代か。内面はヘラ削り後ナデ調整。117・118は土師器瓶の把手である。120は明代青花の蓮子碗で、全釉で疊付を釉・ぎする。121～124は近世の土師器皿で、底部は糸切り離しである。125～131は銅錢の寛永通宝である。125は5枚、127は2枚、129は3枚が銹着する。他にも銅錢数枚と、鐵錢の寛永通宝が6枚以上あるが、鐵錢は鏽が著しいため図化できなかった。以上のうち、108・110・111は柱穴出土で、他は近世墓改葬跡から出土した。改葬跡からは他にも近世～近代の陶磁器や素焼人形、漆塗などが出土している。

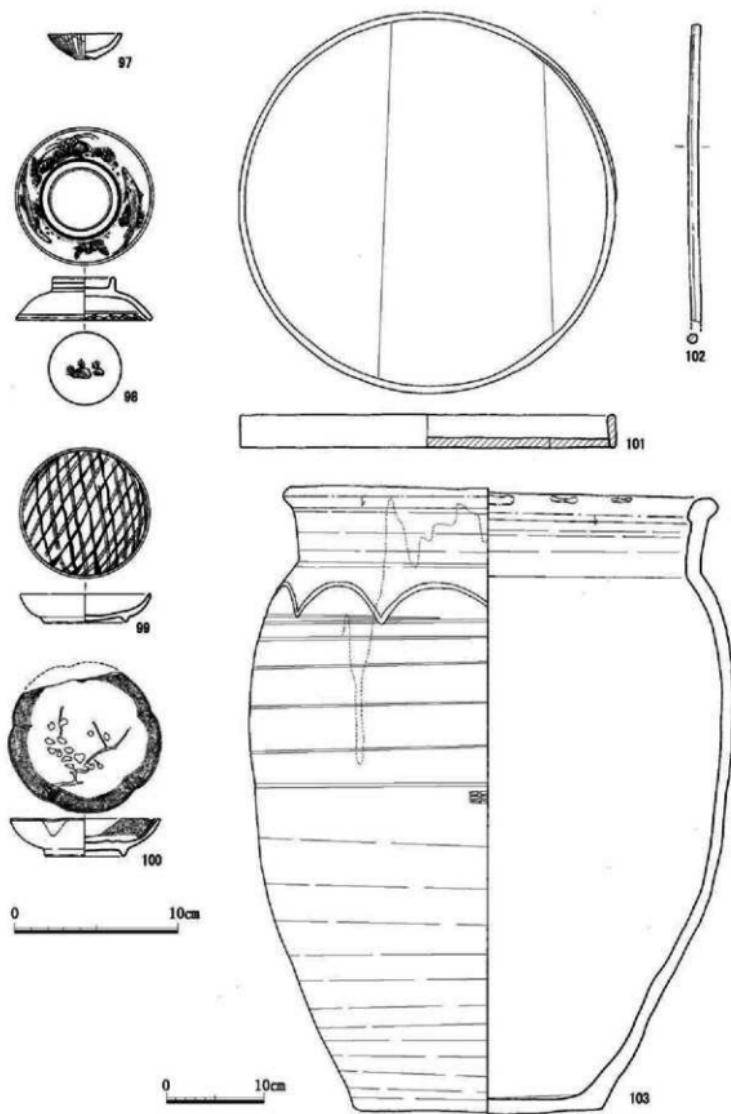


Fig. 32 近世墓SK-101出土遺物 (103は1/5、他は1/3)

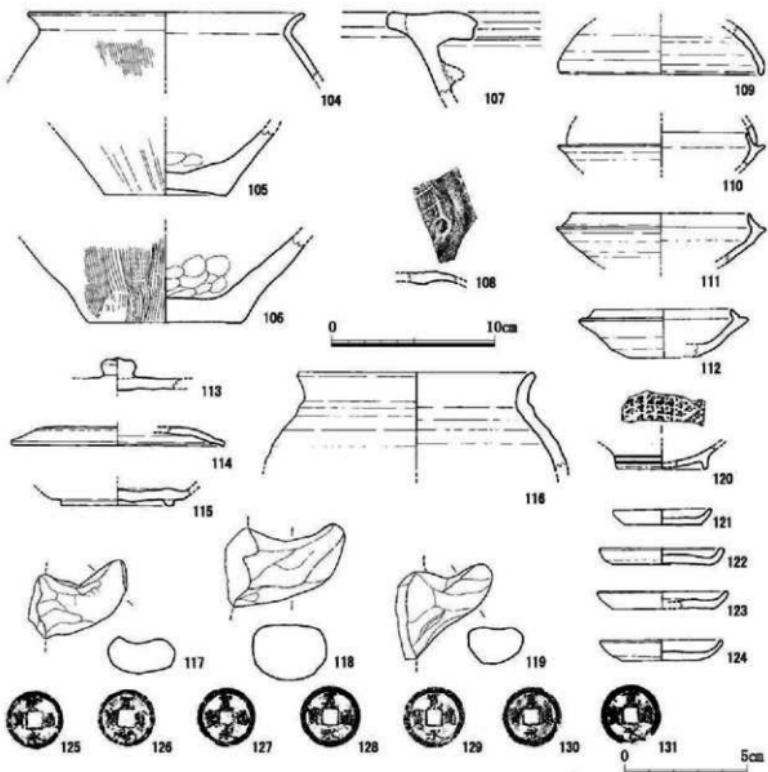


Fig. 33 その他の出土遺物 (125~131は1/2、他は1/3)

(9) 動物遺存体 (福岡市教育委員会埋蔵文化財課 屋山 洋)

東光寺剣塚古墳第3周濠 (SD-003) から出土した動物遺存体は全部ウマの歯で、遺存状態が悪く取り上げた後も細片化が進んでいる (出土状況はFig.18・PL. 6参照)。形から判別できるものはほとんどが左下顎前歯で、少なくとも3本以上はあることから、元々はP₂からM₃まで残っていた可能性が考えられる。また、少量であるが上顎歯片も混じる。上下の歯が出土していることや片方とはいえ左下顎が全て残っていた可能性があることから、遊離した歯が周濠に紛れ込んだりしたものではなく、頭蓋骨または全身丸ごと埋葬もしくは遺棄されたものと思われる。前述したとおり歯の遺存状態が悪く完全に残っていた歯はないが、一部咬合面から根本付近まで残っている3片の歯冠高は①62.7mm、②54.8mm、③40.4mmを測る。これらが一頭のウマの歯として、ウマの年齢と全歯高の相關表 (参考文献P176) にあてはめると、最高でも5~6才程度の若いウマと考えられる。

参考文献:『考古学と動物学』西本豊弘・松井章編 同成社 1999

(10) 増輪 Fig. 34~40, PL.11・12

増輪の総量はコンテナ箱にして20箱で、第1周縁SD-001と第3周縁SD-003から少量出土したが、大半は第2周縁SD-002と、これに切り込む後世遺構や近世墓改葬跡SK-011・012から出土しており、本来SD-002に伴ったものである。これらは接合と遺物観察により同一個体を識別し、10箱30個体を図化したが、他に図化可能な増輪が2箱分ある。140のみSD-003出土で、他はSD-002に伴うものである。残りの8箱は小片が大半を占め、摩滅が著しいほか、色調・胎土・調整が類似するため個体の識別は困難である。SD-002では中層まで古代の遺物が出土したため、下層出土の増輪のみ出土位置を押さえ、Fig.14~16に番号を記した。これ以外の増輪は上・中層や攪乱から出土したものである。ただし、132・136等の完形ないしそれに近い増輪も周縁底面から40cmほど浮いた中層から出土したが位置を示した。また、132・137等は折り重なって出土しており、人為的に投棄されたように思われる。

円筒増輪が多く、明確に朝顔形増輪と分かれるものは3点だが、その他の小片の中に朝顔形の胴部片が含まれると思われる。20箱の全増輪において口縁は41点、底部は9点に過ぎず、他は全て胴部片であり、絶じて底部の占める割合が極端に少ない。形象増輪とみられる破片は3点ある。

第15次調査報告書に述べるように、円筒増輪の口縁形態には3種がある。I：直に立ち、口縁で外反するもの、小さく外反するもの（132、136、137～139）と大きいもの（134）がある。II：ラッパ状に開き端部で更に外反するもの（135、143）。III：直線的に単純に開くもの（144）である。図化した17点の円筒増輪の法量について、最上段を除く胴部最大径（突帯は除く）を計測すると、35～28cmの間に13点と大半が含まれ、40～39cmが3点（132、133）、24cmが1点（154）ある。限られた資料からではあるが、胴部径30cmを前後するサイズが最も多く、Lサイズが少量、Sサイズが僅かに存在するという傾向が伺える。朝顔形増輪も32cm、28cmと最多グループに含まれる。

内面に残る粘土帶の雜ぎ目から、小単位で積み上げを行っていることが分かる。接合面は全て内傾する。外面の第一次調整は縱～斜めの刷毛目で、下から上へ向かって雜に施す。下→左上に弧を描くもの（132～135）、下→右上に向かうもの（136～143）があり、工人の利き腕の違いを示すのであろう。刷毛目原体はその粗密から5種類以上あったと考えられ、2～3条/cmの粗いもの（次頁の説明では「粗刷毛目」と記す）が大半を占め、他に3～4条/cmとやや密なもの、4～6条/cmの細かいもの、8条/cmの更に細かいもの等があるが数は少ない。突帯貼付後の第二次調整は加えない。内面は指押さえ痕を雜にナデ調整しており、刷毛目と同様下から斜め上方向にナデを行うものが多いが、横方向にナデるものもある。口縁内面には横～斜め方向に刷毛目を施すが、ナデ調整ですませるものが少數ある。口縁端部は横ナデするが、内外に幅広く施すものと、端部周辺に限定して行うものがあり、範囲にばらつきがある。突帯の断面形は不正な台形で、通常上端が張り出す。突帯の離痕に貼付位置を示す刺突や横ナデなどは認められず、突帯が水平ではなく上下に蛇行するものが多いことと関係しよう。強く横ナデして突帯を貼付するが、器面との間に僅かに隙間があくような雜なものもあり、同一個体の中でも段により加える力に強弱がある。今回の資料には最下段突帯に断続ナデ技法を施したものは1点もないが、底部自体が数少ないと想定しよう。透孔は突帯貼付後に雜に切り抜いており、不正な円形をなす。底部は無調整で、全9点のうち8点に圧痕がある。圧痕には径1.5～3cmの節のある棒状のもの、径2mm前後の細い棒状で縱方向に極細の条線が入るもの、ハケ状の極細のものがあり、それらをランダムに敷いたような状態である。笛もしくはそれに類する植物の枝葉が原体と考えられる。

色調は橙ないし暗橙色が通常で、焼きが悪いものは灰白色系に発色する。胎土は石英粗粒や細砂粒を含むがさほど多量ではなく、暗赤色の鉱物を含むものもある。焼成は良好なものが多いが須恵質を

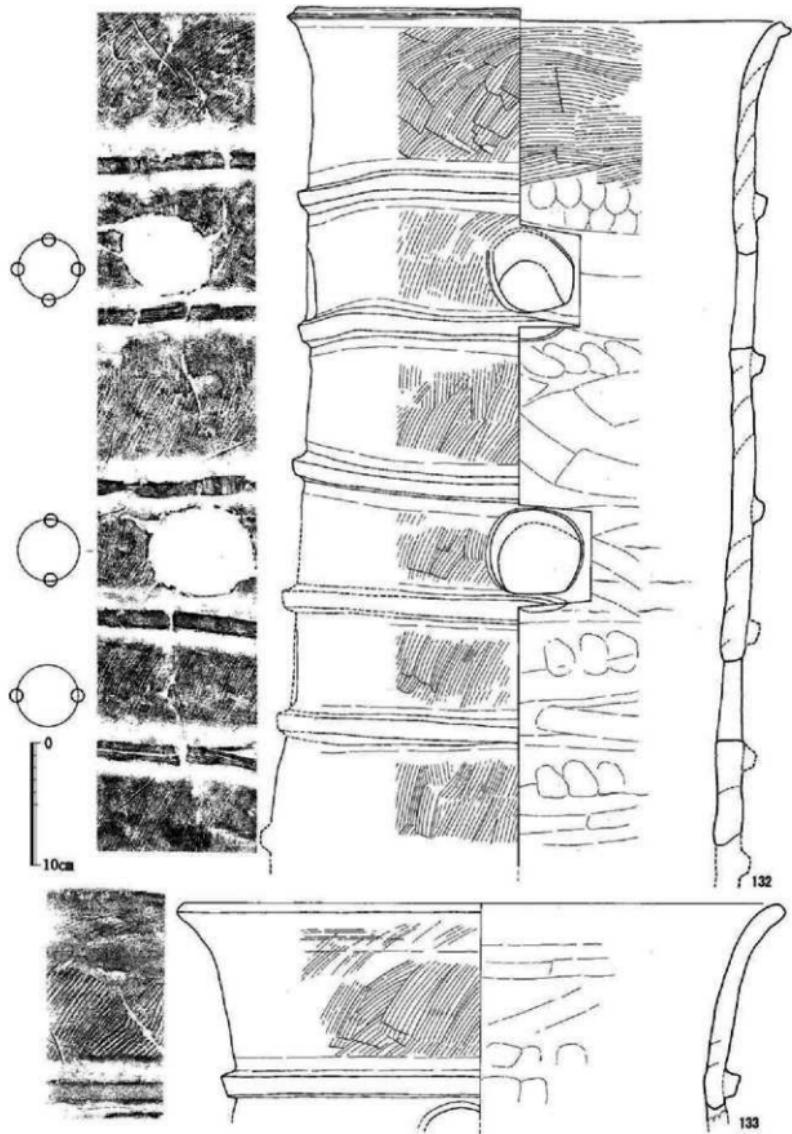
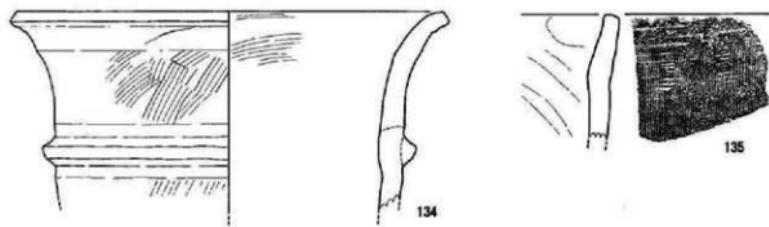
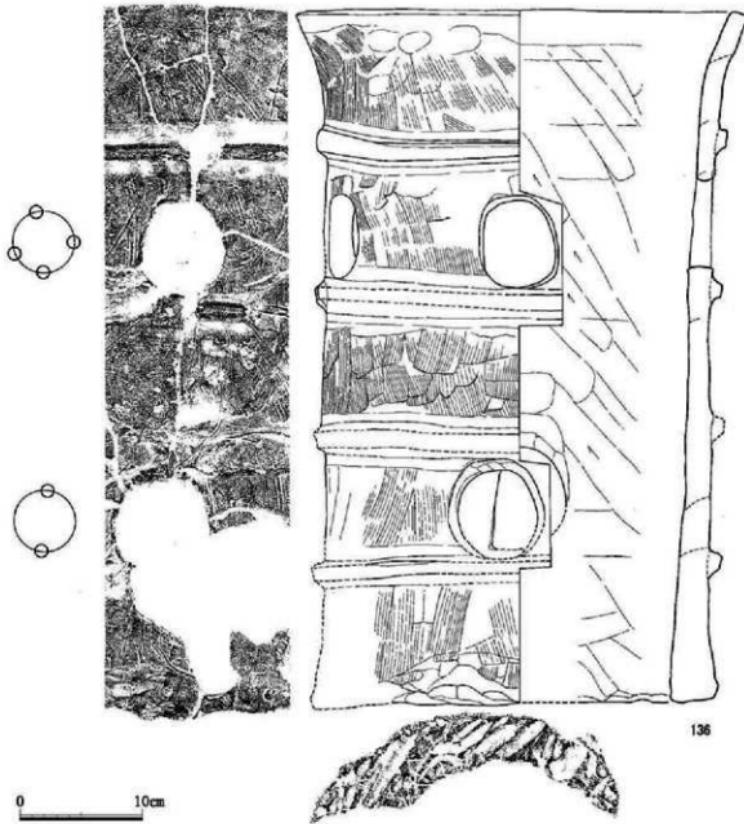


Fig. 34 塗繪 1 (1/4)



134

135



136

Fig. 35 墓繪 2 (1/4)

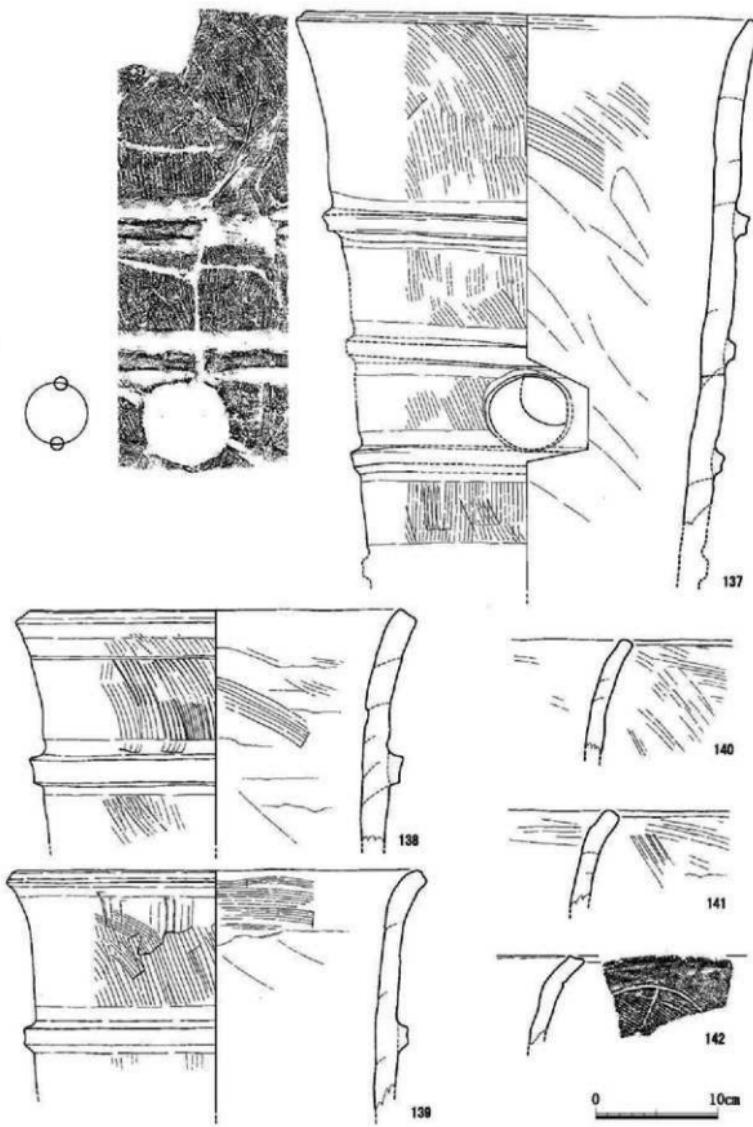


Fig. 36 墓繪 3 (1/4)

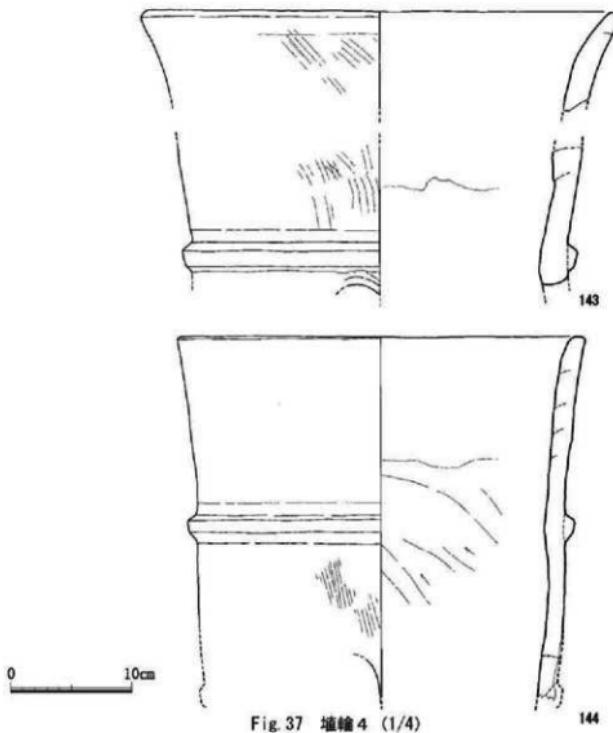
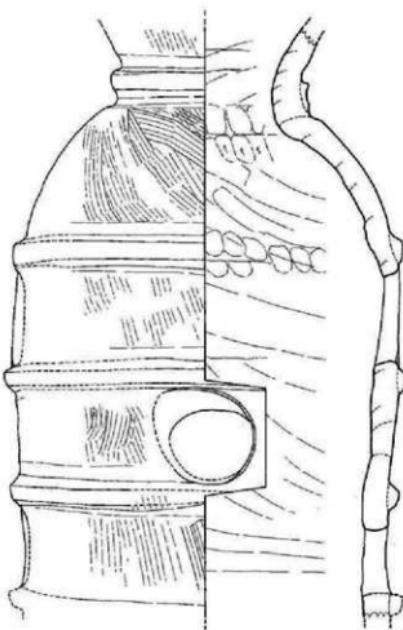


Fig. 37 墓輪 4 (1/4)

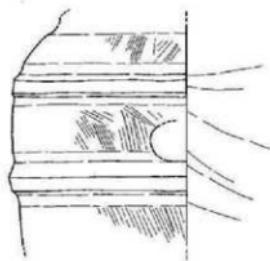
なすものではなく、無黒斑である。今回は赤色顔料を塗布したとみられるものは確認できなかった。

掲載した埴輪は円筒13点、朝顔形3点、胴～底部11点、形象3点で、全形が分かるものは1点のみである。透孔の位置と数が分かるものについては略図を添えた。

132～144は円筒埴輪である。132は底部を欠くが他はほぼ残り、下端に横ナデ痕があることから突帯を挟んでもう一段存在したとみられ、計7段以上となる。3～4条/cmとやや密な粗刷毛目で、口縁内面に幅広に横刷毛目を施す。横ナデは端部に限定される。突帯は上下に蛇行が著しい。器形が歪み、梢円形気味である。133・134はともに1/4周ほどの残欠で、口縁外表面横ナデ、内面横刷毛目である。135は小片で、外面に横位の平行タクキ後、4～5条/cmの細かい刷毛目を縱に施し、端部を横ナデする。136は最下段の外表面1/2周が落するが、他はほぼ残り、唯一全形を知ることができる。刷毛目はやや目が細かく6条/cmを数え、粗刷毛目を疎らに加える。口縁内外横ナデで、内面に横刷毛目は施さない。突帯は上下に蛇行する。透孔は一段おきに配するが、対称ではなく少し位置がずれる。底面には径1.5～2cmの棒状の圧痕が残る。137は上から3段目までがほぼ残る。口縁内面は横～斜めの刷毛目で、横ナデは端部に限られる。138は1/4周強が残る。口縁内外を横ナデし、外面に砂粒が動いて生じた沈線がある。粗刷毛目で、口縁内面にも幅広に施す。突帯は強い横ナデだが、縱刷毛目的一部分が消

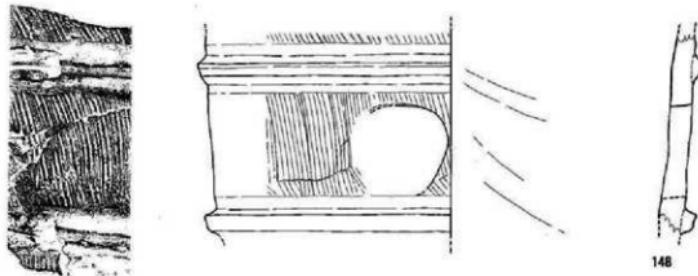


146

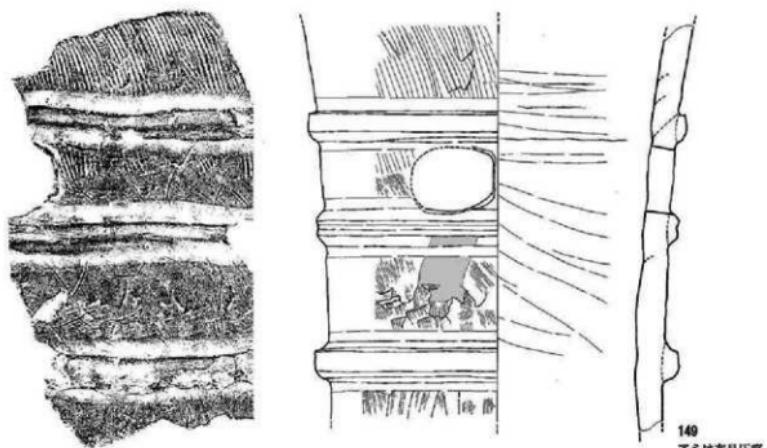


147

Fig. 38 墓葬 5 (1/4)



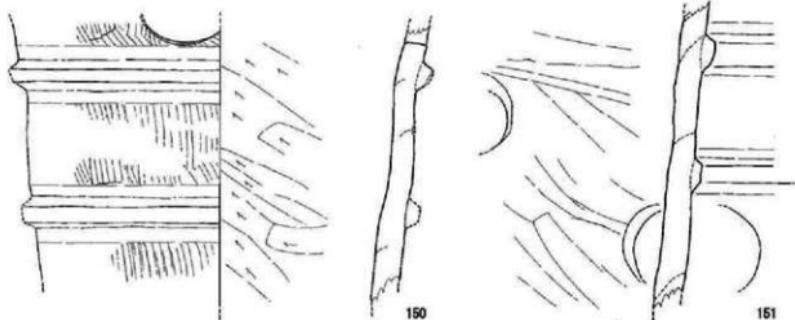
148



149

アミは布目压痕

0 10cm



150

151

Fig. 39 墓繪 6 (1/4)

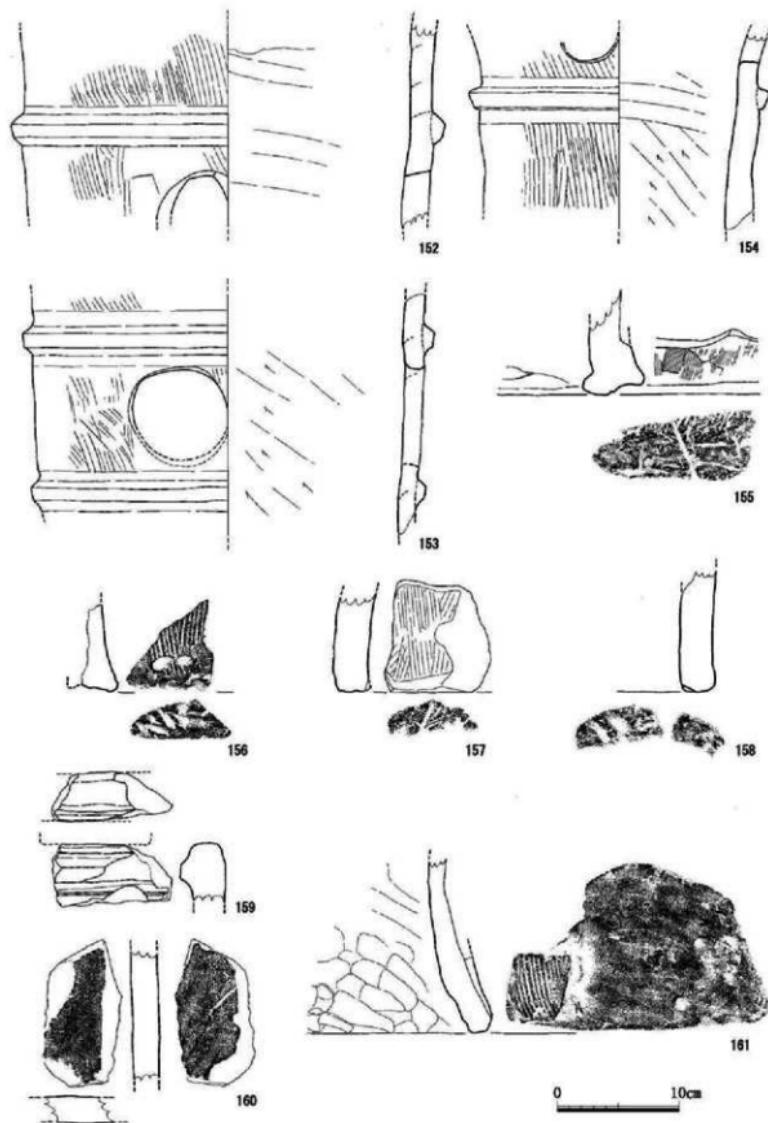


Fig. 40 墙绘 7 (1/4)

えず)に残る。139は1/4周弱の破片である。粗刷毛目の後、口縁内外に薄く粘土を被せて5条/cmのやや細かい刷毛目を施し、端部から外面に横ナデを加える。140・141は口縁部片で、粗刷毛目を内外に施し、端部周辺は横ナデする。142も口縁部小片で、刷毛目は6条/cmと細かく、口縁内外を横ナデし、弧と直線でヘラ記号を入れる。143は接合しないが同一個体とみられる2片からなる。外面は粗刷毛目で口縁端部を横ナデするが、内面は摩滅して調整不明。144は口縁部の外外面とも器面が落する。

145~147は朝顔形埴輪である。145は口縁の小片で摩滅しており、内面に横刷毛目らしき小口圧痕を留めるのみ。146は頸部から4段目までがほぼ残る。外面は斜めの粗刷毛目で、内面は押さえ痕を荒くナデ調整しており粘土帯の離ぎ目を残す。円筒埴輪に比べて突帯が低い。透孔は千鳥状に配する。147は1/4強が残り、外面は粗刷毛目の上から6条/cmの細かい刷毛目を被せ、内面のナデはやや丁寧で粘土帯の離ぎ目を残さない。やはり突帯は低く、透孔は1孔認められるが配置は不明である。

148~154は胴部片である。148は1/2周弱の破片で、崩が少しある。149は縦に長い1/4周ほどの破片で、突帯が蛇行するため図の傾きに確實さを欠く。中央で刷毛目原体を換えており、上は粗刷毛目、下は8条/cmの細かい刷毛目である。中央の突帯から直下に布目が残っており、突帯をつかんで持ち上げる際に付着した圧痕であろうか。150は3/4周分があるが二つに分かれている。外面は少し摩滅している。焼成がやや甘く、器表面が淡灰色を帯びる。151は縦に長い破片で、摩滅が著しい。焼成不良。152は1/4周、153は1/3周、154は1/5周がそれぞれ残る。155~158は底部片で、底面に圧痕がある。

159・160は家形埴輪の一部であろう。159は前後面と上面が生きており、窓または戸口の一部と考えられる。窓の直下に台形突帯と浅い沈線1条を巡らす。160は板状をなしており、壁の一部か。一面はヘラ状工具によるナデ、他面はケズリの後ナデ調整。161はかなり内傾するため形象埴輪としたが確証はない。外面に1cm弱の厚さに粘土を被せて刷毛目調整を加えるが、大部分は落している。内面は指頭と細い角材のような工具で押されており、他の埴輪底部の調整に比べて異質な感がある。底面には径3mmの細い棒状の圧痕がある。小片だが底径30cm前後となる。

以上の埴輪は、132~137、139、144~151、154、156、158、160、161の20点がSD-002より、140がSD-003より、他の9点は近世墓改葬跡より出土した。

第三章 おわりに

調査面積に比べて遺構は少なかった。東光寺剣塚古墳後円部トレンチでは旧表土面の標高が9.4mで、これに隣接する当調査区南西端の遺構面が8m前後であることから、古墳築造時も含めて後世に1m以上も削平されたと考えられるが、それを差し引いても各遺構の時期には隔たりがあり散発的である。前方後円墳に隣接することも一因であろうか。以下では時期ごとに遺構を概観してまとめとする。

1. 弥生時代の遺構

調査開始前には第89次調査検出の甕棺墓が当地區にまで広がっていると予想されたが、調査区西壁際で中期後半の甕棺墓1基を確認したのみで、墓域が東側へは伸びないことが分かった。しかし、甕棺片が古墳周濠や他の遺構から出土しており、これらが甕棺墓を破壊している可能性がある。SD-003に切られたSK-019は小児甕棺が抜かれた墓壙かもしれない。甕棺墓は東光寺剣塚古墳後円部北側の第89次や、南側の第15・16・100次調査で確認しており、丘陵の尾根に沿って造営されたと考えられるが、その詳細な分布状況はなお不明である。

その他、掘立柱建物1棟と土坑1基が擾土からみて弥生時代~古墳時代前期頃の遺構と考えられるが、遺物が少なく詳細時期は不明である。

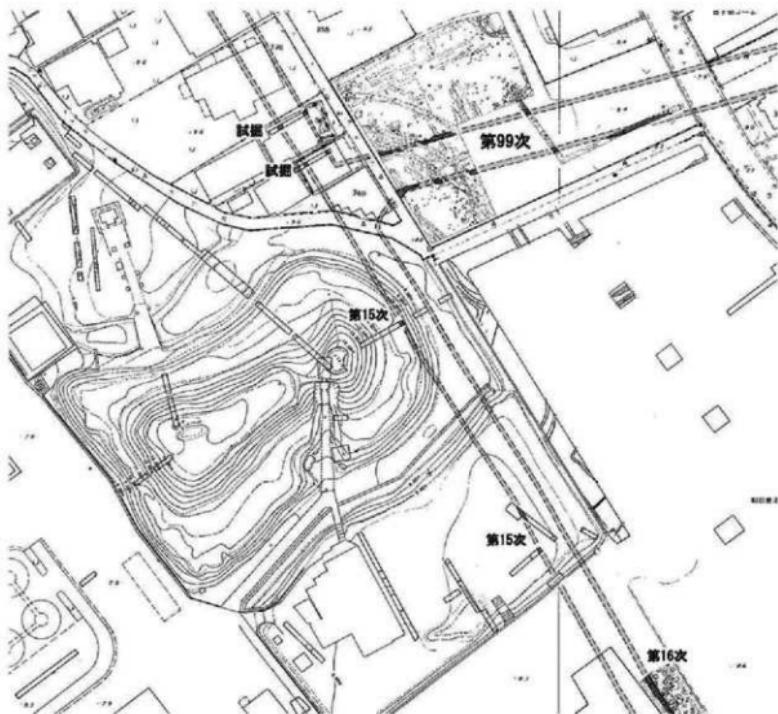


Fig.41 古墳時代前期溝の推定線 (1/1,000)

2. 古墳時代前期の遺構 Fig.41

SD-040の検出により、古墳周囲に寸断されていた溝が直線的に連続するものであることが分かり、磁北から 80° 東偏して並走する2条の溝に復元された。溝内端の幅は推定線上で7.8mを測り、底面には凹凸があって水流の痕跡はない。覆土から弥生時代後期の土器も出土するが、遺構の切り合いから埋没時期は古墳時代前期と考えられる。一方、那珂・比恵遺跡群を略南北に貫く同時期の「並列二条溝」の存在が指摘されているが、近隣では第15・16次調査や試掘調査で認められ、当調査区の西側を通過すると想定される。この付近では磁北から 30° 前後西偏するとみられ、本調査溝との交差角度は 110° 前後となる。西端のSD-007は調査区外へと進展するが、極めて南側へ湾曲するような平面プランを示しており、交差する部分に近いことからその影響かもしれない。また、溝の東側は調査区外へと伸びて行くが、第一章-3で述べたように東側には狭い谷を挟んで独立状の台地があり、2条の溝の延長線はこの北端をかすめる。この付近では第66次調査が行われ数条の溝も確認しているが、時期と方向が一致する溝は認められない。なお、西側の延長は第15次調査トレンチでは確認されていないが、敢えて伸ばせば第50次調査A区検出の古墳時代前期の「防御機能を持った溝」SD-04と直交しよう。

当該期の遺構は他に、I区北西隅で「ハ」の字形に配置された溝2条を検出したが、中世溝に切られて残りが悪く、性格は不明である。

3. 東光寺剣塚古墳周濠 Fig.42・43

最も内側の第1周濠SD-001は調査区南隅で一部を確認した。中世以降に溜め池として利用されており、原形が損なわれている。第2周濠SD-002は幅3.0~4.0m、深さ0.7~1.15mで、第1周濠と11mの間隔をあける。8世紀代まで明瞭な座みとして残っていたよう、埋土中から古代の溝や土坑が掘り込まれていた。最も外側の第3周濠SD-003は幅1m前後、深さ0.23~0.58mで、第2周濠との間隔は5.0~5.6mを測り、厳密には平行していない。第3周濠は早い段階で埋没したとみられ、遺物が少なかった。

第15次調査報告の『東光寺剣塚古墳』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第267集)の図4は多色刷りの印刷ミスによりトレンチ位置が最大1mほどずれている。修正図をFig.3に1/1,000で示した。また、1/500の都市計画図に各調査区を落として古墳周濠を復元した図をFig.42に示した。既に指摘のあるように周濠は同心円を描かず、円心に多少のずれが認められる。特に古墳主軸付近では第2・3周濠は東へ大きく間隔を開くと想定される。この復元図によれば、第2・3周濠外縁と前方部第1周濠外縁との距離は、各々109m、117mとなる。

第2周濠SD-002から出土した埴輪はいずれも濠底面より浮いており、周濠がある程度埋没し古墳が荒れ始めた時期に流れ込んだか、あるいは人為的に投棄された可能性も考えられる。図化した埴輪の出土位置を接合状況とともに改めてFig.43に示したが、後世の破壊により失われた部分が大きい。個体としてまとまっているのは、西から順に146、150、137、132、136で、他はいずれも1/4周以下の小破片である。このうち137、132、136は近接して出土し、137の大部分と132は折り重なって出土した。これらの埴輪は周堤上に配されたと考えられるが、出土状況から原位置を推定するのは困難である。この他、第2周濠の下層から鉄鎌、第3周濠からは馬齒が出土した。

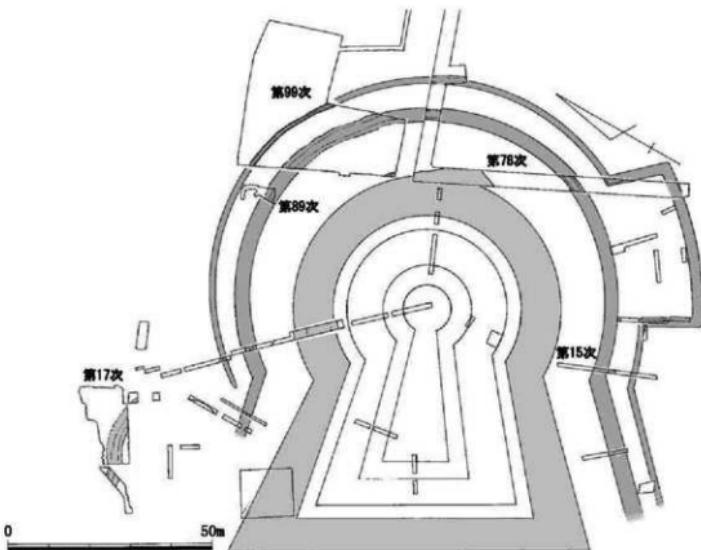


Fig. 42 東光寺剣塚古墳復元推定 (1/1,200)

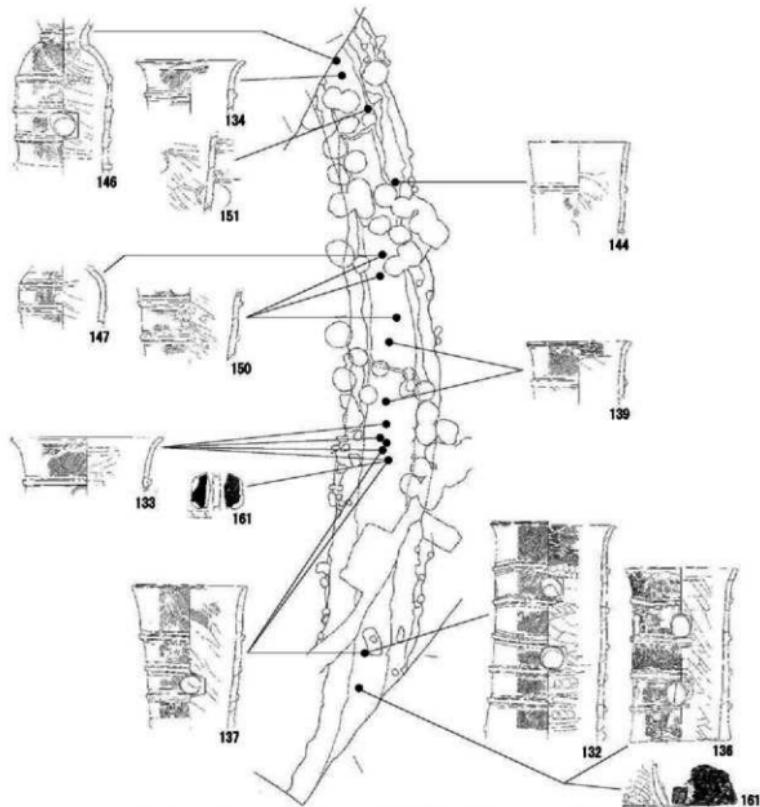


Fig. 43 第2周濠 (SD-002) 塗輪出土状況 (1/200、塗輪は1/16)

他の古墳時代後期の遺構には、I区東隅に検出した浅い縫みSX-027・028がある。当初は円墳の残骸かと考えたが、範囲が限られ残りが悪く、確証を摑むには至らなかった。

4. 古代～近世の遺構

SD-002に切り込む古代の大溝SD-013と土坑SK-016は同時期とみられ、溝は土坑に接するあたりが最も深くなっており、第2周濠の縫み等を利用した集水設備の可能性が考えられよう。

中世では15世紀代の大溝のコーナー部分と、大型の土坑等を検出した。周辺では北側の第18次調査で南北方向の溝、第36次調査で東西方向の大溝、東側の第28次調査で南→東に矩形に曲がる溝を検出しておらず、いずれも現在の街区に近い方位をとるが、本遺構との繋がりについては不明である。これらは中世後期の居館の一部と考えられるが、その実態についての検討は今後の課題である。また、大型の土坑は粘土採掘坑と考えられる。

最後に、近世墓は第78次調査報告書にも述べるように、古墳の北東（本調査区周辺）、北西（ビール工場の建設工事で発見されたと伝える）、南の尾根沿い（第16・78次調査で確認）に営まれたと考えられ、本調査区では少數を除いて近代に改葬を受けていた。ただし、改葬漏れとなった人骨が2体出土し、うち1体は10～11歳の小児骨とみられ、希少な研究資料を提供した。

附. 1 福岡市那珂遺跡群第99次調査出土の近世人骨

九州大学大学院比較社会文化研究院 中橋孝博

はじめに

福岡市の東南部、現在の福岡空港の西側一帯は、板付遺跡に代表される遺跡密集域の一つである。旧博多市街の郊外に当たるこの地域では、中～近世期にも各所で墓地が営まれたようで、これまでも席田青木遺跡（中橋、1993）などから相当数の人骨が出土している。2004年度の福岡市教育委員会による調査でもそうした墓地の存在が明らかにされ、2体の近世人骨が出土した。そのうち1体はほぼ完全な未成人骨であり、この時期の希少な研究資料として今後の研究に活用されていこう。

遺跡・資料・方法

那珂遺跡群は、福岡市博多区東光寺町・剣塚古墳の北東側畠地に位置する。福岡市教育委員会によって2004年度に発掘調査が実施され、剣塚古墳の周濠の他、弥生時代から近世期に至る各時代の多くの遺構が検出された。この内、江戸時代の墓地群は近代に改葬を受けていたが、人骨2体が出土した。いずれも櫛棺の被葬者で、成人、未成人の各1体ずつからなり、特に子供の骨は極めて保存良好である。出土遺物に関する考古学的な検討から、子供は江戸末（19世紀前半）、成人骨は江戸後期のものと考えられている（出土遺物についてはP34～35参照）。

計測は主にMartin-Saller（1957）に従い、性判定には筆者らの算出した方法（Nakahashi&Nagai, 1986；中橋1988）を援用した。

結果・考察

1. 101号（SK-101出土）

ほぼ全身骨が遺存している。以下の歯式にも示すように、第2乳臼歯が残存し、第2大臼歯も未萌出であり、歯冠や歯根の形成状況から10～11歳の小児の遺骨と見なされる。性別は不明である。

(M ¹)	M ²	m ²	P ¹	C	I ²	○		I ¹	I ²	○	P ¹	/	M ¹	(M ²)
(M ₁)	M ₂	m ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	P ₁	m ₂	M ₁	(M ₂)

(○：歯槽開放、/：欠損、（ ）：未萌出）

この小児骨の眼窩上壁に、クリップラオルビタリアの痕跡が確認された（図版参照）。これは主に鉄欠乏性貧血によって引き起こされる病変であり、歯にも明らかなエナメル質減形成が観察されることからも、おそらく生存時に不良な、もしくは偏った食生活を送っていたか、あるいは重度の寄生虫疾患などに襲われていた可能性が窺える。

ただ、大腿骨長は284mmで、この年齢の小児としては平均値と大差なく、特に目立った発育遅滞は認められない。

2. 102号（SK-102出土）

改葬の影響を受けて、骨の保存が悪く、特に頭蓋は小片のみ回収された。遺存部を図1に示したが、これ以外にも、部位が不明確な大腿骨片や脊椎、肋骨などの小片が遺存している。

性別を明確に示す部位は無いが、下記のように四肢がかなり頑丈であることから、男性の可能性が高い。また、歯の咬耗がかなり進行し、下顎の歯槽も閉鎖部が多いことから、熟年から老年期のものと見なされる。

残存歯を以下に示す。上顎歯はいずれも遊離歯である。

/ / / / /	P ¹	C	F	P ²	/	P ³	F	/	P ⁴	/	/	/	/
/ × M ₁ P ₂ ○ × / /										○ M ₁ M ₂ /			

(○:歯槽解放、/ :欠損、×:歯槽閉鎖)

計測結果を主な比較群と共に表1に示した。

特に目に付く点として、上腕骨の頑丈さを挙げておきたい。三角筋粗面の発達がきわめて良好で、その周径は比較群の平均値を大きく上回っている。前腕にはこれほど明瞭な傾向は見られないが、近隣の青木近世人でも見られたように、全体的に屈強な特徴が見て取れる。ただ、身長などは不明である。

表1 上肢骨計測値（男性）

	那珂		席田青木		天福寺		桑島 ²⁾		江戸 ³⁾		吉母		九州 ⁴⁾	
	(近世)	(近世)	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
<u>上腕骨</u>														
5 中央最大径	27	30	24.1	22	22.9	14	20.8	-	22.7	20	22.6	106	21.9	
6 中央最小径	19	30	18.6	22	17.7	14	15.9	-	17.7	20	17.6	106	16.9	
7 骨体最小周	77	28	67.1	22	63.8	14	62.4	-	63.5	20	62.5	106	61.8	
7a 中央周	80	30	70.0	22	66.5	14	67.0	-	69.4	20	66.1	106	63.7	
6/5 骨体断面示数	70.4	30	77.3	22	77.6	14	76.5	-	78.3	20	78.1	106	79.1	
<u>橈骨</u>														
3 最小周	46	26	44.9	23	42.2	-	-	-	41.6	20	41.9	63	40.1	
4 骨体横径	19	27	18.3	23	17.5	-	-	-	16.6	20	16.9	63	16.0	
4a 骨体中央横径	-	22	16.9	23	15.7	-	-	-	15.6	20	15.5	63	15.2	
5 骨体矢状径	13	27	13.2	23	12.6	-	-	-	11.9	20	12.1	63	11.7	
5a 骨体中央矢状径	-	22	13.3	22	12.6	-	-	-	12.0	20	11.9	63	11.9	
3/2 長厚示数	-	14	20.4	21	19.8	-	-	-	19.8	16	19.8	61	20.4	
5/4 骨体断面示数	68.4	27	72.6	23	72.0	-	-	-	71.8	20	71.6	60	71.4	
<u>尺骨</u>														
11 矢状径	13	30	13.6	24	13.1	-	-	-	12.8	19	12.8	63	12.8	
12 横径	19	30	17.6	24	17.0	-	-	-	16.2	19	12.8	64	16.5	
1/12 骨体断面示数	68.4	30	77.7	23	77.9	-	-	-	79.0	19	73.7	63	74.9	

1)立志(1970)、2)遠藤、他(1967)、3)専藤(1957)、溝口(1957)

以上、今回、那珂遺跡群から出土した近世人骨については、1体のほぼ完全な小児骨が含まれていたことを最後にもう一度注記しておきたい。近世期のみならず、各時代を通して未成人骨は出土がごく少数に限られ、過去の人々の成長パターンはもとより、成長期の食、社会環境や疾病率など、未成人骨から得るべき様々な知見が殆ど未開拓のままである。今回の出土はわずかに1体のみであるが、その出土の意義は大きく、今後とも未成人骨の蓄積が望まれる。

文献

- 遠藤萬理・北條輝幸・木村賛(1967)：「四肢骨」、増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体、鈴木、他編、東京大学出版会。
- Martin-Saller(1957) : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.
- 中橋孝博(1988) : 「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成(永井昌文教授追憶記念論文集)、六興出版。
- 中橋孝博(1993) : 「福岡市席田青木遺跡出土の赤生・近世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集。

- 中橋孝博・永井昌文(1985) :「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
- Nakahashi, T and M. Nagai(1986) :Sex assessment of fragmentary skeletal remains. J. Anthropol. Soc. Nippon, 94.
- 溝口静男(1957) :「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」、人類学研究 4。
- 専頭時義(1957) :「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」、人類学研究 4。
- 立志悟郎(1970) :「熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人、上肢骨の人類学的研究、下肢骨の人類学的研究」、熊本医学會雑誌40。

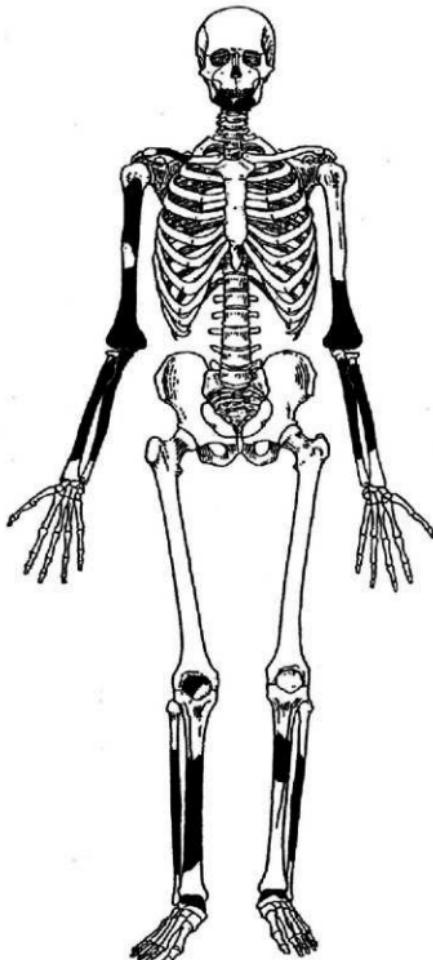


図1. 102号(男性) 遺存部位

図版 (101号人骨・小兒)



クリブラ・オルビタリア



エナメル質滅形成

附. 2 那珂遺跡群第99次調査の花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

調査地は福岡市博多区東光寺町に所在し、那珂川と御笠川に挟まれた台地上に立地する。6世紀中頃に築造された東光寺剣塚古墳の北東側に隣接し、その周濠の他、弥生時代中期の甕棺墓、古墳時代前期の溝、弥生～古墳時代の掘立柱建物、古代の溝・土坑、中世の溝などを検出した。本報告では、これらの覆土の一部を対象とし、古植生に関する情報を得ることを目的として花粉分析を実施した。

1. 試料

分析した試料は、弥生時代中期の甕棺墓SK-033墓壙下層、古墳時代前期の溝SD-022下層、古墳第2周濠SD-002の東側ベルト上下層（上層は古代溝SD-013）・第3周濠SD-003の東側ベルト上下層、中世後期の溝SD-030最下層・土坑SK-010最下層から採取した覆土、計8点である。詳細を表1に示す。

表1. 分析試料一覧

試料番号	遺構名	Pig.番号	層名	土質	遺構の内容	時期
1	SD-002東側ベルト	16	①層	暗褐色粘質土	溝(SD-013)	古代(8世紀)
2			⑤層	黒褐色粘質土	前方後円墳第2周濠	6世紀
3	SD-003東側ベルト	18	①層	黒褐色粘質土	前方後円墳第3周濠	6世紀
4			②層	黒褐色粘質土		
5	SK-010	29	③層	暗褐色砂質土	土坑	中世後期
6	SD-022	8	③～④層	粘質土	溝	古墳時代前期
7	SD-030	22	⑥層	暗褐色粘質土	溝(根か)	中世後期
8	SK-033	26	③層	深黑色クロボク土	甕棺墓墓壙	弥生時代中期後半

2. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、簡別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

3. 結果

結果を表2に示す。表中で複数の種類をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。

いづれの試料においても検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかつた。木本花粉ではマツ属、ニレ属－ケヤキ属、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科、ヨモギ属、キクア科が数個体検出されるのみである。また、シダ類胞子も認められる。プレパラート内の状況写真は図版に示す。

表2. 花粉分析結果

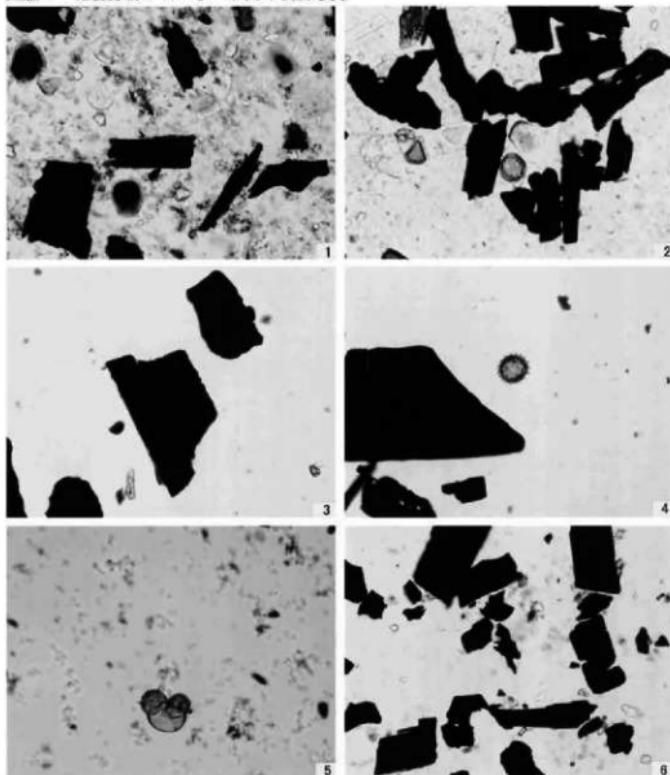
試料番号 遺構名 層名	1 SD-002東側ベルト ①層	2 SD-002東側ベルト ⑤層	3 SD-003東側ベルト ①層	4 SD-003東側ベルト ②層	5 SK-010 ③層	6 SD-022 ③～④層	7 SD-030 ⑥層	8 SK-033 ③層
木本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属	-	-	-	-	-	-	-	1
ニレ属－ケヤキ属	-	-	1	-	-	-	-	1
草本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	-	-	-	-	-	-	-	1
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	-	1	1
ナデシコ科	-	-	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	1	-
キクア科	-	-	-	-	-	-	-	-
不明花粉	-	-	-	1	-	-	-	-
シダ類胞子	25	17	13	7	-	2	33	-
合計	0	0	1	0	0	0	0	1
木本花粉	0	0	1	0	0	1	2	2
草本花粉	0	0	1	0	0	1	0	0
不明花粉	0	0	0	1	0	0	0	0
シダ類胞子	25	17	13	7	0	2	33	0
絶計(不明を除く)	25	17	15	7	0	3	35	3

4. 考察

分析の結果、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは取り込まれた花粉が消失したという2つの可能性があげられる。一般に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971)。今回、花粉が検出されなかつことは、遺跡が台地上に立地することを考慮すると、堆積後、好気的環境下にあり、その後の経年変化で分解・消失したことが考えられる。これは、わずかに検出された花粉化石の中に外膜が腐蝕しているものがみられたことからも示唆される。当時の環境を把握するためには、今後、珪藻分析などを実施し、堆積環境の検討を行うことも望まれる。

引用文献: 中村 純, 1967, 花粉分析, 古今書院, 232p.、徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子・化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

図版1 花粉分析プレパラート内の状況写真



1. 状況写真(SD-002東側ベルト⑥層)
3. 状況写真(SK-010⑩層)
5. 状況写真(SK-033③層)

2. 状況写真(SD-003東側ベルト①層)
4. 状況写真(SD-022③~④層)
6. 状況写真(SD-030⑪層)

50 μm

PLATES (図版)





1. I 区全景（北東から）



右下が東光寺剣塚古墳

2. I 区全景（左上が北）

PL2



1. II区全景（西から）



2. II区西半部（北西から）



3. II区東半部（南西から）



1. SB-026 (東から)



2. SD-040 (東から)



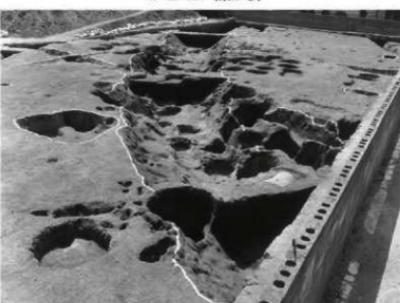
3. SD-007 (北東から)



4. SD-021 (東から)



5. 第1周塗 SD-001 (北西から)



6. 第2周塗 SD-002 (北西から)



1. 第2・3周辺 SD-002・003 (南東から)



2. 第2周辺 SD-002 (南東から)



1. SD-002西側ベルト土層断面（東から）



2. SD-002中央ベルト土層断面（南東から）



3. SD-002東側ベルト土層断面（南東から）



1. SD-002 西側遺物出土状況（西から）



2. SD-002 東側遺物出土状況（東から）



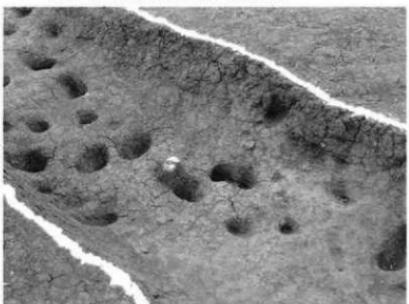
3. SD-002 中央遺物出土状況（南東から）



4. SD-002 東側遺物出土状況（南東から）



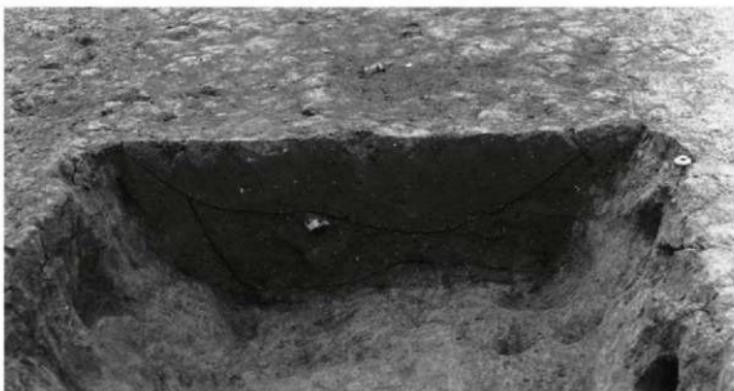
5. 第3周塚 SD-003（西から）



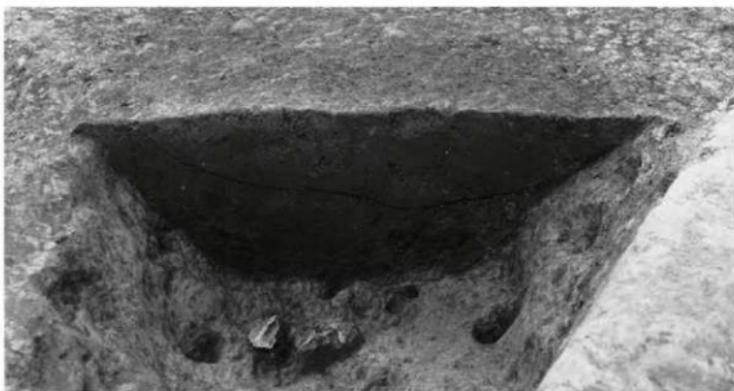
6. SD-003 馬齒出土状況（北西から）



1. SD-003西側ベルト土層断面（東から）



2. SD-003中央ベルト土層断面（南東から）



3. SD-003東側ベルト土層断面（南東から）



1. SD-004・013 (北東から)



2. SD-013・SK-016 (北西から)



3. SX-027・028 (南から)



4. SD-030 (南西から)



5. SE-039 (南から)



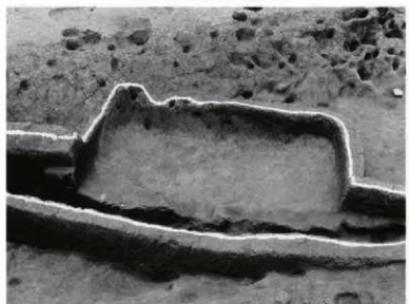
6. 石棺墓 SK-033 (東から)



1. 妻棺墓 SK-033 (東から)



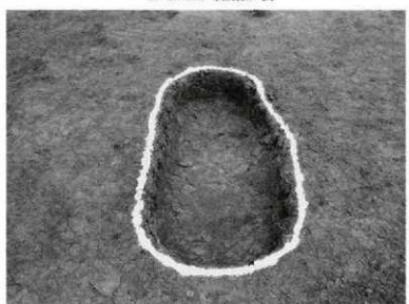
2. SK-010 (北西から)



3. SK-016 (北東から)



4. SK-018 (西から)



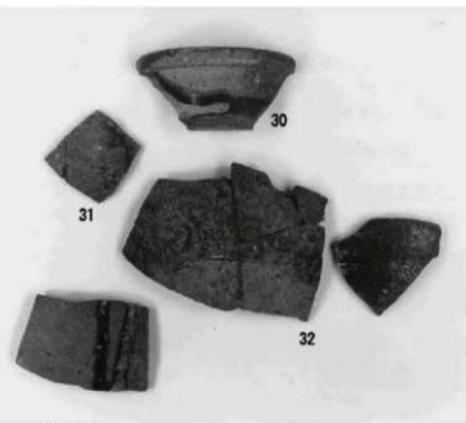
5. SK-024 (南東から)



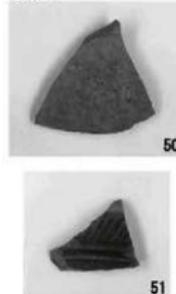
6. 調査作業風景 (北西から)

PL.10

SD-002



SD-005



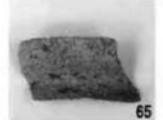
SK-033



SD-030



SD-031



78

出土遺物 I (縮尺不同)

番号はFig. に一致する

SK-101



97~102

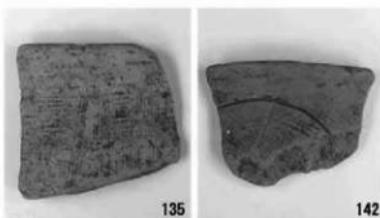


103

埴輪



132



135

142



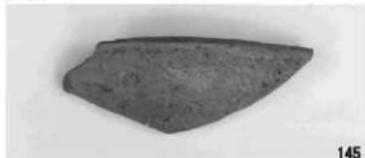
136



137

番号はFig. に一致する

出土遺物Ⅱ（縮尺不同）



145



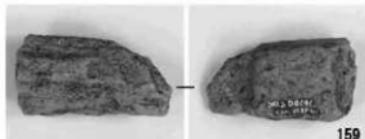
146



147



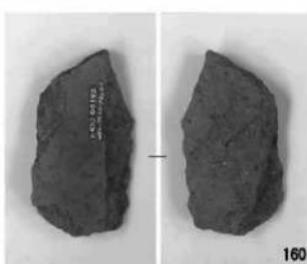
155 底面



159



149



160



161

出土遺物III (縮尺不同)

番号はFig.に一致する

報告書抄録

ふりがな	なかよんじゅういち 一なかいせきぐんだいきゅうじゅくじちょうさほうこく一						
書名	那珂41 一那珂遺跡群第99次調査報告一						
副書名							
卷次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第887集						
編著者名	吉武 学						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2006年3月31日						
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 (af)	調査原因
那珂遺跡群 第99次	福岡市博多区 東光寺町 1丁目 357-1番地内	40130	0085	33°34'27"世界測地系	130°26'00"世界測地系 20040514 20040730	1,049	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	遺跡概要			特記事項	
那珂遺跡群 第99次	墓、集落、古墳	弥生時代中期	墓-弥生時代中期-壇棺墓-弥生土器/			古墳時代前期の並列塚+前方後円墳周濠-埴輪	
		古墳時代前期	集落-古墳時代前期-構4+井戸1-古式土師器/				
		古墳時代後期	古墳-古墳時代後期-前方後円墳周濠3-土師器+須恵器+埴輪+鉄慈1+馬齒1/				
		奈良時代	集落-奈良時代-溝1+土坑1-土師器+須恵器/				
		室町時代	集落(居館?)-室町時代-溝3+土坑1-土師器+輸入陶磁器/				
		江戸末~明治	墓-江戸末~明治-壇棺墓+改葬跡-陶磁器+木製品+土製品+銅鏡+鐵錢+人骨2				

那珂41

一那珂遺跡群第99次調査報告一
福岡市埋蔵文化財調査報告書第887集

2006年(平成18年)3月31日
発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 梨播磨印刷
福岡市中央区警固3丁目4-1